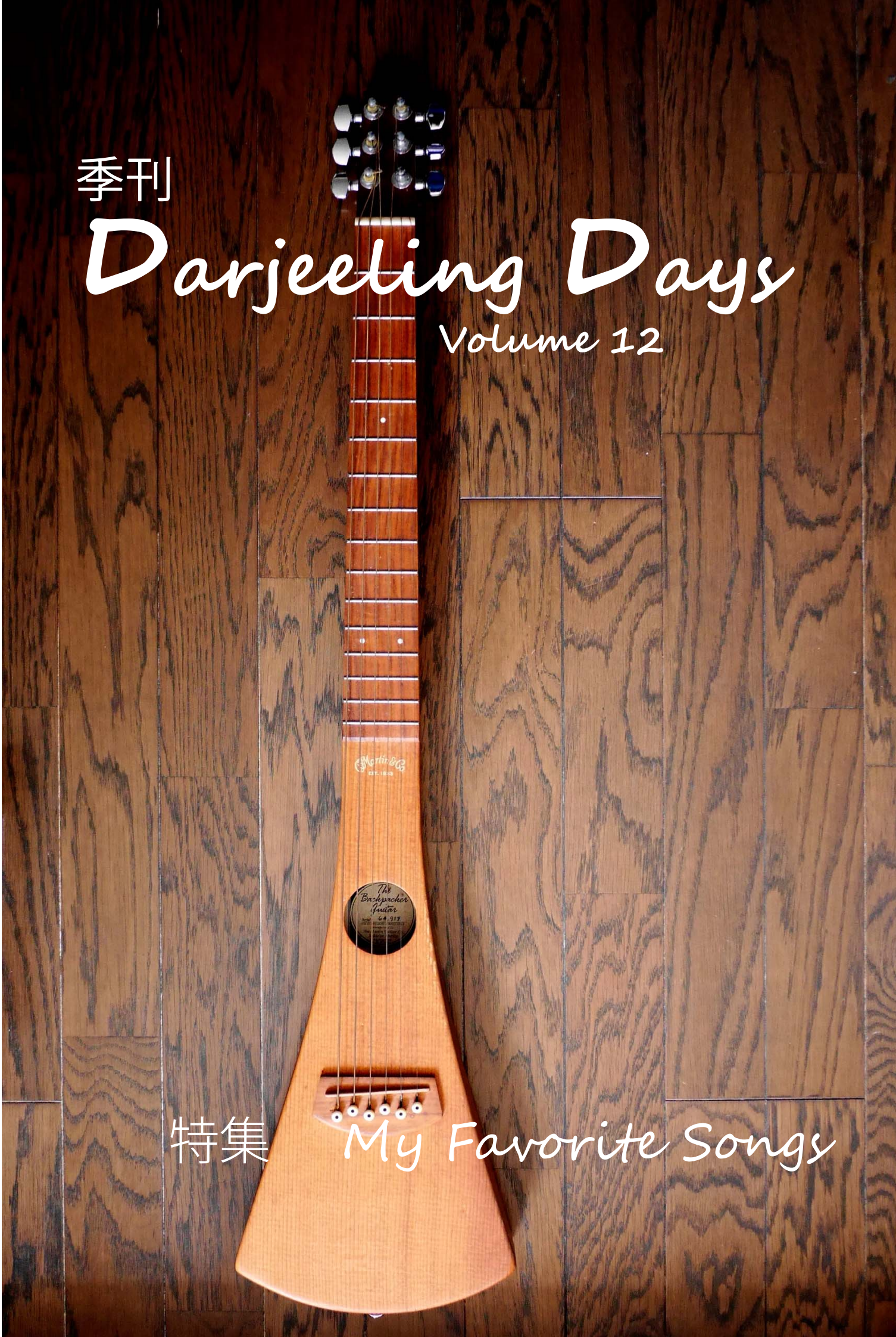


季刊

Darjeeling Days

Volume 12

特集 My Favorite Songs

Darjeeling Days

Volme12 2017.03

C O N T E N T

特 集

04 My Favorite Songs

06 1．アニメソング

07 2．歌謡曲（邦楽）

08 3．ハードロック（洋楽）
- 09 The Song Remains The Same （Led Zeppelin）
- 10 Highway Star（Deep Purple）
- 11 Show Must Go on（Queen）
- 12 Hart Breaker（Grand Fank Lealroad）

13 ハードロック論

16 4．プログレッシブロック・インダストリアルロック
- 17 Raundabout（Yes）
- 18 More Than a Feeling （BOSTON）
- 19 Open Arms（Journey）
- 20 I Won't Hold You Back(Toto)
  Will You Still Love Me?（Chicago ）

21 5．フォーク＆ロック（邦楽）
- 22 タイムマシンにお願い（ｻﾃﾞｨｽﾃｨｯｸﾐｶﾊﾞﾝﾄﾞ）
  空飛ぶ円盤に弟が乗ったよ（四人囃子）
  心もよう（井上陽水）
- 23 美しすぎて（GARO ）
  あの頃のまま（Bread & Butter ）

24 6．フォーク＆ロック（洋楽）
- 25 Teach Your Children （CSN&Y）
  THE WEIGHT （The Band）
  Big Bad Bill Is Sweet William Now （Ry Cooder）
  Salt, Sun and Time （Bruce Cockburn）

26 7．ニューミュージック（邦楽）
- 27 花紀行（荒井由実 ）
- 28 生まれくる子供たちのために（オフコース）
- 29 さよなら夏の日（山下達郎 ）
  駅（竹内まりや）

スマフォをＱＲコードに翳していただくと、特設ページからこちらで
掲げた曲をyoutube等で聴くことが出来ます。
（PCからはこちらにアクセス　→http://www.tearecpe.net/dd/dd12.html）

30　American Night（浜田金吾）
　　追憶（スターダストレビュー）
31　NO END SUMMER （角松敏生）

32　8．フュージョン（ロックからジャズへ）（洋楽＋邦楽）
33　Departure In The Dark（深町純）
　　My Sweetness（Stuff）
34　CAPE LIGHT（The Square ）

35　9．ジャズ（洋楽）
36　But beautiful（Bill Evans）
37　Here‘s That Rainy Day （Toots Thielemans）
38　Autumn Leaves （Manhattan Jazz Quintet）
　　Wishing-Hoping （Kenny Drew Trio）
39　The Köln Concert （Keith Jarrett）

40　10．ニューエイジミュージック（洋楽＋邦楽）
41　Anne's Song　（William Ackerman）
　　Montana（Paul Winter）
　　山越へ（土井啓輔）
　　Sentimental Wave （溝口肇）

42　11．DIVA海外の歌姫たち（洋楽）
43　Again （Janet Jackson）
　　Listen （Beyonce）
　　Because of You （Kelly Clarkson）

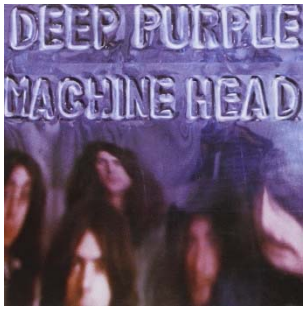
44　12．J-POPS（邦楽）
45　最愛　（KOH+）
　　Love Story（安室奈美恵）
　　Moon Crying（倖田來未）
46　13．そして最近好きな曲たち（邦楽＋洋楽）
47　虹に気が付かず（JiLL-Decoy association）
48　There I Said It（Adam Lambert）

写　真

49　Travel Photography　/　佐渡へ
53　スナップの愉しみ　/　月の魔力

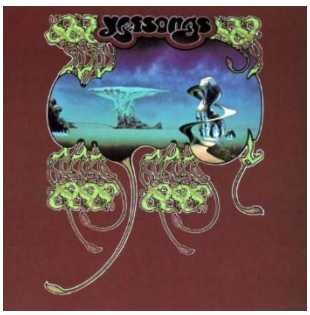
連　載

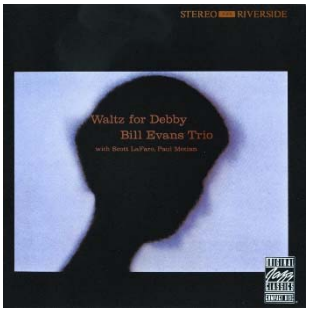
54　花図鑑　　山茱萸（サンシュユ）
55　お茶の快楽　　茶の木神社の神茶
56　旅のカフェ　　fukadaso　café（清澄白川）
57　旅のスイーツ　沢根だんご（佐渡）
58　今日の一枚　　ドラムスティック
59　Voice From Editor

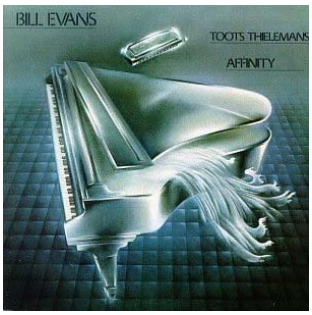


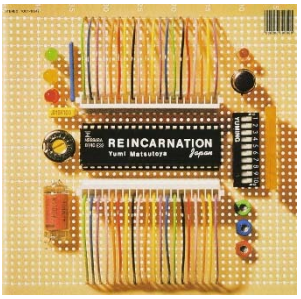
特集

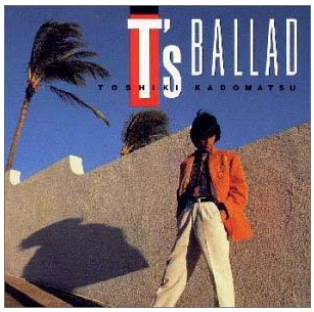
My Favorite Songs

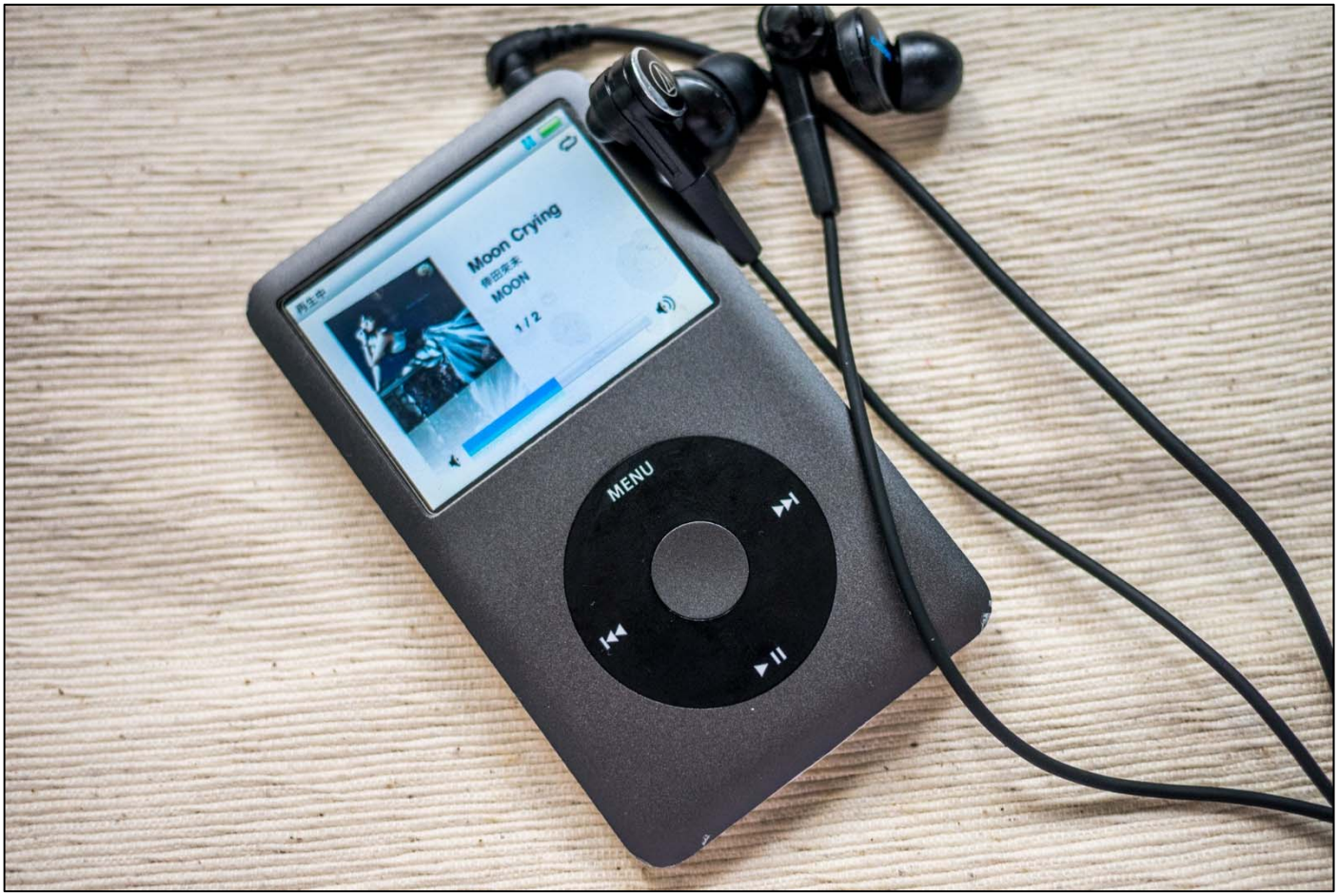












My Favorite Songs

No Music, No Life !

今から10年ぐらい前だろうか。ライターの納富廉邦さんに第6世代のiPod Classicを譲ってもらったとき、そこにUp Loadされていた曲のジャンルの多様性に驚いたものだった。似たような年代なのに、聞いている曲のなんと違うことか。

僕の人生の傍らには、いつも音楽があった。それは誰でも同じだろう。でも、傍らにあった音楽は、それぞれ、その人によって違う。納富さんの聞いていた曲たちを知り、その違いをとても面白く感じた。

人生の様々な場面で遭遇した曲たちは、さまざまな情景や思い出とともに記憶され、一度その曲を聴くと、それがスイッチのように作用して、目の前には一番印象に残っている記憶が３D画像のように浮かび上がってくるから不思議だ。その曲たちは、様々にその時々の僕に作用し、時には、指針を示す。脳科学的に言えば、聴覚からの刺激はいわゆる古い脳である大脳辺縁系に伝達されることが分かっており、扁桃体や記憶を司る海馬への刺激も多く含まれる。つまり、そのときに聴いた音や音楽はその場の空気や感情までも包んでおり、それらを含めて記憶として定着される。音楽を聴くと、当時の思い出が一瞬にしてよみがえるという現象は、こういった人間の脳の特性でもあるのだ。

僕が今までに聞いてきた曲は数知れない。いまだに使っているこのiPod ClassicにUp Loadされた曲は、ロック、ジャズ、クラシック、そして民俗音楽、さらに心に染み入るバラードや、演歌から最近の流行歌まで、ほとんど無節操に見えるかもしれない。

それでも、それらの曲たちは様々な思い出と結びついて、僕の中に存在する。そのかなりの数の氾濫している曲たちを、記憶を遡ってあれこれ思い出してもう一度整理してみたら面白いのではないか。

だから、最初にお断りしておく。今回の特集は、昨年のこの時期に発行した「食の記憶」以上に、超私的な内容になっている。僕が生まれて、今に至る人生の傍らに常にあった音楽の数々。今回は、それをずらりとここに並べてみようという試みだからだ。「好きな曲年表」みたいなものまで作ってみたのだけれど、到底一つに絞り切れるわけもない。だから、ジャンルごとに好きだった曲たちを、ここに並べてみようということなのである。あなたの想い出の、そして大好きな曲たちと比べながら楽しんでいただければ幸いだ。

1．アニメソング(邦楽)

一番最初に聴いた曲が何だったのか、いまではもう全然覚えていないが、記憶に残っている一番最初の曲というのは、幼稚園入園直前に放映開始された鉄腕アトムの主題歌だった。

1963年にスタートした手塚治虫の鉄腕アトムは、その後のアニメブームの火付け役になったわけだが、この63年という年は、実はアニメの当たり年だったようだ。

鉄腕アトムのほかにも、鉄人28号、オオカミ少年ケン、エイトマンという、当時誰もが見たはずのアニメがスタートした年だった。65年のスーパージェッターとジャングル大帝の主題歌も好きな曲だった。どの主題歌も今でも歌える。何度も何度も繰り返し歌ったからだろう。

その後も、おばけのQ太郎、おそまつくん、リボンの騎士、マッハGoGoGo、パーマン、ゲゲゲの鬼太郎、巨人の星、サイボーグ009、サスケ、ひみつのアッコちゃんなど、いろんなアニメを見た記憶があるが、サイボーグ009以外の主題歌はあまり歌った記憶がない。あとは実写版のウルトラマンとマグマ大使を見たぐらいか。主題歌は好きというほどでもなかった。

小学校高学年になった際によく見たのがルパンⅢ世(71年)。ビッグバンド風インストのテーマ曲は格好良くて今でも好きだ。他にも72年の海のトリトンとデビルマンは、アニメも主題歌も大好きだった。

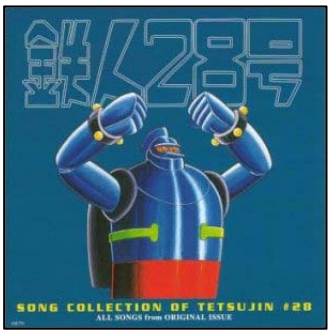
大人になってから見たアニメといえば、息子が小さかったころに一緒に見たものが中心だったが、ルパン関連の映画とジブリ作品は好きだった。でも、ジブリのアニメ曲は「風立ちぬ」以外はどうでもいい感じだ。

ここ数年のアニメソングは、かなり格好いい。声優が歌手よりも上手に歌うケースやバンドの完成度がとても高い。若手を起用するケースが増えているのもヒットに繋がる要因だろう。

特に西尾維新の小説『化物語』をアニメ化した作品で使われる音楽の数々は秀逸だ。その中でもsupercellの「君の知らない物語」はお勧めの一曲。

さらに、ネット漫画をアニメ化した『ReLIFE』の主題歌、PENGUIN RESEARCHが演奏する「ボタン」もなかなか格好良くていい感じだ。

そして、昨年話題となったアニメ作品『君の名は』の主題歌、RADWIMPSの「前前前世」は、いまだにヒットを続けている。



2. 歌謡曲（邦楽）

小学校に入るとアニメソングだけではなく、自然と毎日のようにテレビで流れてくる「歌謡曲」というものを耳にするようになる。1960年代後半から70年代前半の歌謡曲といえば、グループサウンズ（オックスだけは歌った記憶が・・。）と演歌の流れを引いたポップスらしき奇妙な音楽が耳に残っている。そんなあまり興味の持てない音楽の中で、72年に登場した天地真理は、今でいうところのアイドルの走りだった。「恋する夏の日」はハードロック少年の扉を開きつつあった僕も口ずさんだ曲だった。そこから西城秀樹や野口五郎などが登場し、日本中を挙げての歌謡曲ブームへと突入していったような記憶がある。

70年代後半になると74年に「ひと夏の経験」をヒットさせた山口百恵の全盛時代が到来。さらに太田裕美やピンクレディーやキャンディーズなども次ぎ次ぎヒット曲を飛ばし、78年には音楽番組の「ザ・ベストテン」が始まったため、多くの歌謡曲を耳にするようになった。

80年代になると、松田聖子、中森明菜が次ぎ次ぎにヒットを量産し、そこに単発ヒットを飛ばす歌手なども混るようになり、かなり多彩な歌謡曲界になっていった。

正直に言うと、歌謡曲はあまり聞かなかった。70年代後半の高校時代には、ピンクレディー全盛期だったが、クラスの中で男子が真似して踊っているのを、冷ややかな目で見ていた記憶は鮮明に残っている。

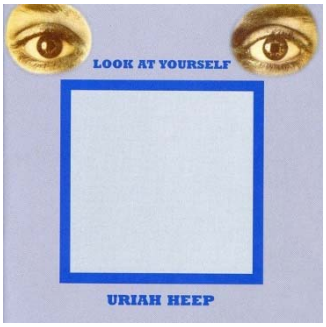
強いてあげるなら、初めて買ったレコードは、73年のあべ静江の「水色の手紙」。その後は、高橋真梨子の「あなたの空を飛びたい」を気に入ったぐらいだった。もう少し時代が下がってから、松田聖子の『BIBLE』を買った。

社会人になってカラオケを歌わされるようになって覚えた曲には、安全地帯の「恋の予感」と中山美穂の「世界中の誰よりきっと」があったのだけれど。

80年代中ば以降にデビューした刀根麻里子と原みゆきは、全然売れなかったがビジュアルが好きだった。そしてビジュアルといえば、やはり森高千里は別格であった気がする。

その後は、J-POP分野の一部は聞いてはいるものの、ジャニーズ、EXILE、AKBばかりになり、あまり興味が持てない昨今なのである。

3．ハードロック（洋楽）



　僕が初めてロックを聴いたのは、小学校4年の冬休みのこと。当時、姉貴の中学の先生が引率して、毎シーズン志賀高原一ノ瀬にスキーに行ってたのだが、その一ノ瀬高原スキー場のゲレンデに、大音量で流れていたのがChicagoの”25 Or 6 To 4”（長い夜）とLed Zeppelinの”Immigrant Song”（移民の歌）だった。

　どちらの曲も何度も何度もゲレンデで流され、とても特徴的な曲だったために、すっかり刷り込まれてしまったわけだが、考えてみれば同じ年にビートルズのレットイットビーが発売になっていたにもかかわらず、何故この2曲だったんだろうと、いまだに不思議に思う。

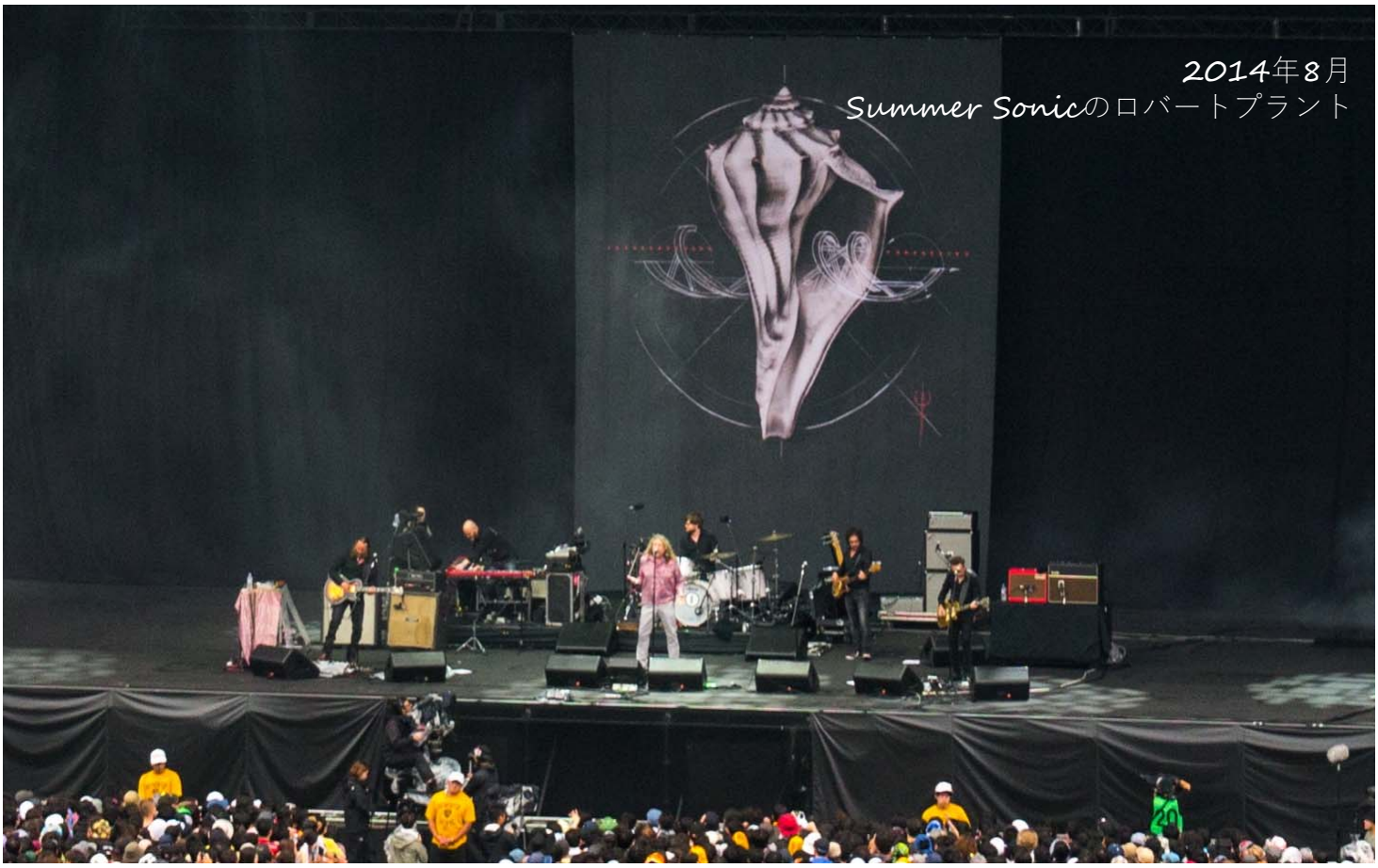
　もし、ここでビートルズが流れていたのなら、その後の僕の音楽人生は大きく変わっていたに違いない。すなわち僕はビートルズをぶっ飛ばして、いきなりハードロックのレジェンド、Led Zeppelinの世界に足を踏み入れてしまったわけだ

　一度足を踏み込むと、ずっぽり嵌るのがハードロックの世界。姉貴の影響もあり、72年のDeep purple武道館ライブに行ったことで、小学生でありながら、他の同級生に先駆けハードロックフリークという状況に陥る始末。だから、Uriah Heep、Cream、WHO、Free、Grand Funk Railroad、The Jeff Beck Group 、Black Sabbath、そしてDeep Purpleなど、幅広いバンドの音楽に耳を傾けた。

　特に、 Led Zeppelin とDeep Purpleにはずっぽり嵌り、中学時代を通じ、ロック一筋だった気がする。

　その後もQUEENの初来日ライブに行ったり、第4期Deep PurpleやRAINBOWの武道館ライブなどにも嬉々として出かけて行った。自分でもギターを習い始め、中学卒業時の謝恩会で、BaNaNa-UG（陽水や安全地帯のサポートメンバーで、現在もウズマキマズウのキーボーダー）とバンドを組んで演奏したものだった。

　さらに、KISS、 Blue Öyster Cultなど多くのバンドが登場するが、その中でもポール・ロジャースがボーカルを務めたBad Compnyは、ブルース色が強い、玄人受けするバンドで、かなり聞き込んだ。また、82年に登場するAsiaは、ハードロックとプログレッシブロックの流れを汲むスーパーバンドだった。



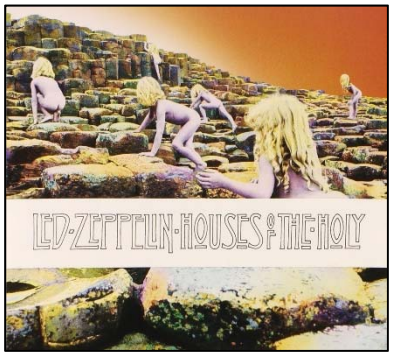
The Song Remains The Same（Led Zeppelin）

Led Zeppelin。偉大なるハードロックのレジェンドだ。今更僕が語ることもない、その音楽は、いまとなっては、他のバンドを寄せ付けないほどのストイックさと多様性があったといえるだろう。

初めて聞いたのは”Immigrant Song”（移民の歌）。そして翌年には”Rock’n Roll”や”Black Dog”というLed Zeppelinの絶頂期に直接触れることが出来るという恩恵にあずかった。

Led Zeppelin といえば、名曲ぞろい。1968年のデビュー以来、どのアルバムもヒット曲を飛ばすブリティッシュハードロックの最高峰と称されたバンドである。ギターのジミー・ペイジ、ボーカルのロバート・プラント、ベースのジョン・ポール・ジョーンズ、そしてドラムスのジョン・ボーナムの4人組。生み出した名作も、”Whole Lotta Love”, “Immigrant Song”, “Since I've Been Loving You”, “Black Dog”など、有名曲ばかり。”Stairway to Heaven”はギターに嵌った少年なら、必ずコピーしたはずだ。

数ある彼らの曲の中で、実は僕のお気に入りは、73年発売の『Houses of the Holy（聖なる館）』収録の”*The Song Remains the Same*”だ。たまたまDeep Purpleの最新アルバム『Who Do We Think We Are（紫の肖像）』を一曲丸々流すNHK FMラジオを聴いていた際、次週予告に登場したのがこのThe Song Remains the Sameのイントロ部分だったわけだ。あまりの恰好よさに、翌週の番組まで待てず、



そのままレコード屋に飛んで行って即座に購入したアルバムの一つである。

Zepのアルバムは、ファーストアルバムから75年に発売された『フィジカル・グラフィティ（Physical Graffiti）』まで持っていた。ちょうど6枚目のアルバムにあたる。この2枚組アルバムのB面最終曲” Kashmir”も、後までずっと演奏され続けられるほどの名作で、当時何度も聞いた思い出の曲の一つだ。

Zepは残念ながら、80年にドラマーのジョン・ボーナムの事故死をもって解散した。

その後、ジョン・ボーナムの息子であるジェイソン・ボーナムがドラマーとして参加し、「LED ZEPPELIN」名義のステージパフォーマンスが、何度か行われているが、現在はロバート・プラントが単独ソロアルバムを出すなど、グループとしての再結成は行われていない。

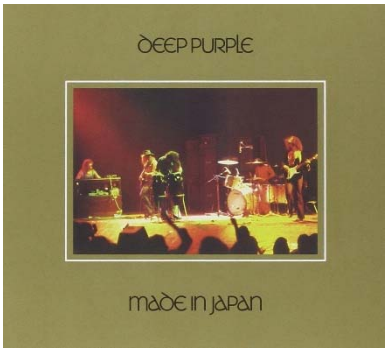
Highway Star（Deep Purple）

僕が本格的にはまったブリティッシュハードロックバンドは、なんといってもDeep Purpleだった。当時中学生だった姉貴が、これでもかというぐらいリピートしていたため、いつの間にか僕もすっかり虜になってしまっていた。しかも、小学校6年の時に、伝説の武道館ライブを目の当たりにして、嵌らないわけがない。

いまなら「アイドル大好き！」と騒ぐ年代だが、リッチー・ブラックモアの破壊的なギターパフォーマンスに、顔面をぶちのめされたくらいのインパクトがあって、まさに彼のパフォーマンスにアイドル並みに嵌ってしまった。そこからはもう、中学卒業するまで、ハードロック一辺倒という少年時代を過ごすことになった。

Deep Purpleは、1968年にイギリスで結成されたロックバンドで、69年から73年までの第二期全盛時代に世界的な有名なバンドになった。

キーボードのジョン・ロード、ギターのリッチー・ブラックモア、ドラムスのイアン・ペイスを中心に、その後メンバーチェンジが繰り返されるものの、今でも２期のボーカル、イアン・ギランを中心に、イアン・ペイス、ロジャー・グローヴァー（ベース）とともに現在も活動が続けられている。



Deep Purpleといえば1972年に発売された『マシンヘッド』収録の”Highway Star”と”Smork on the Water”は、いまや誰もが知る代表曲だ。

イアン・ギラン、ロジャー・グローバーが抜け、グレン・ヒューズとデイヴィッド・カヴァデールを新たに加えた第三期の『Burn』も名作だが、僕は72年の武道館ライブを見てしまったから、やはり一番好きなのは、『Made in Japan』に収録された名曲”Highway Star”ということになる。他のバンドに比べて彼らを好んだのは、ジョン・ロードの重厚なハモンドオルガンとリッチー・ブラックモアの唸るようなストラトキャスターの音の重なりに、ぞくぞくするような魅力を感じたからだろう。リッチーの怪物のようなギターテクニックも、ジョンのオルガンがあったからこそ冴えわたったといえるのではないか。そのジョンもいまや鬼籍の人。時の流れは、ずいぶん彼らを遠くに押しやってしまった。

2015.07バンクーバーライブ
QAL 北米ツアー（息子撮影）

The Show Must Go On（Queen）

ZepとPurpleに嵌っていた僕に、「このバンドすごいぞ！」と教えてくれたのは、中学時代に同じバンドを組んでいた哲だった。彼が持ってきたのが『Queen II』というアルバムだった。『Seven Seas of Rhye（輝ける七つの海）』が収録されたストレートなロックアルバムだった。

Queenは、1971年に結成され、73年にデビューしたイギリス出身のロックバンドで「世界で最も売れたアーティスト」にも名前を連ね、01年にはロックの殿堂入りをしたロックレジェンドだ。

その後のアルバムは、技巧的な楽曲が多く、ストレートなハードロックファンには否定的な意見が多かった。特に、日本では若い女性に圧倒的なファンが多く、アイドル的な存在だったこともあり、当初僕も苦手だった。

しかし、75年4月17日の東京武道館初来日ライブの圧倒的なステージパフォーマンスを目の当たりにして、その偏見も一蹴された。

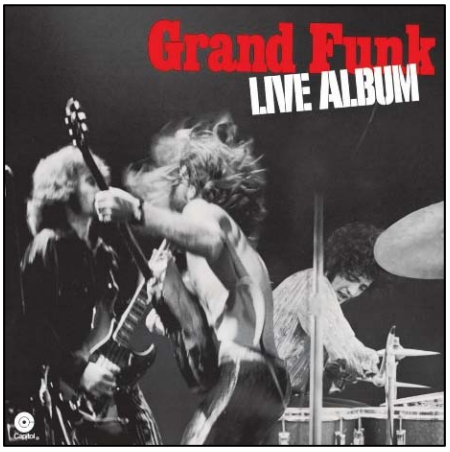
メンバーは、フレディ・マーキュリー、ブライアン・メイ、ロジャー・テイラー、ジョン・ディーコンの4名。代表曲としては”Bohemian Rhapsody”、”We will rock you”、”We Are the Champions”、”Another OneBites the Dust”、”Killer Queen”など、多数にのぼる。

僕が好きなのは、実はもっと時代を下った91年初頭に出されたアルバム『Innuendo』に収録されている名曲中の名曲”Show must go on”だ。このアルバムは、QUEEN結成20周年、そしてグループ最後のアルバムにあたる。この年の11月24日にフレディーマーキュリーが45歳の若さで逝去した。

その後も残されたメンバーによるクイーン名義での活動は断続的に続いており、05年から09年までポール・ロジャースをボーカルに迎え活動を行い、その後もケリー・エリスやレディー・ガガなどと活動したが、12年からはアダム・ランバートを迎え「Queen +Adam Lambert（QAL）」として活動を現在も続けている。

フレディーの歌う”Show must go on”は、アルバムとPVの中だけでしか聞いたことがなかったが、QALライブで聞くこの曲は、原曲よりも重厚な印象を受け、好きな一曲になっている。

Heartbreaker （Grand Funk Railroad）



　中学時代はハードロック三昧の毎日で、家にいればレコードが擦り切れるほどロックを聴いてた。中学の卒業式の謝恩会で演奏した曲のほとんどがDeep Purpleの曲ばかりだったのだが、一曲だけ違うバンドの曲を演奏した。それがGrand Funk Railroadの”Heart Breaker”だった。
　1969年にアルバム『On Time』でデビューしたアメリカのロックバンドだが、ZEPのアメリカ公演の前座をやった際に、その凄まじい歌と演奏力で聴衆を熱狂させたことにより、ロックファンにその名を轟かすようになったといわれる。
　僕が好きだった、“Heartbreaker”は、この『On Time』からシングルカットされた曲で、後から知ったことだが、日本のグループサウンズの代表バンド「ザ・タイガース」がコンサートのレパートリーとして取り上げたり、井上陽水がこの曲のコード進行を模倣して「傘がない」を書いたといわれるように、日本でも早くから人気があった。

　Purpleよりも早い71年に来日しているが、激しい雷雨の中で行なわれた後楽園球場の演奏は、あまりの過激ぶりに当時のロック伝説のひとつに数えられる。
　72年以降は、よりポップス的な方向へ舵を切り、アルバム『We‘re an American Band』を発表。同名シングル曲が全米1位を獲得する大ヒットを記録達成した。
　続くアルバム『Shinin’ On（輝くグランド・ファンク）』では、"The Loco-Motion" をハードロック風にアレンジしたカバーがシングルカットされ、こちらも全米1位を獲得、 Grand Funk Railroad最大のヒットシングルとなった。
　Grand Funk Railroadは、どう考えても、アメリカンバンド以前のハードなロックが大好きだった。その中でも特にこの名曲 ”Heartbreaker”が好きだったわけだが、この曲で魅せるMark Fredrick Farner （ボーカル＆ギター）の粗削りなギターフレーズを一生懸命コピーし、演奏した。
　そういえば、当時、日本テレビのオーディション番組「スター誕生!」第15回決戦大会（75年）に合格し、ホリプロに所属した久木田美弥という中学の後輩がいて、彼女が学校でデビュー曲を歌ったのだが、その時にバックバンドとして演奏したのもこの時だった。
　さて、 Grand Funk Railroadに話を戻すが、彼らはその後、 76年に『Born to Die（驚異の暴走列車)』と『Good Singin‘, Good Playin’（熱い激突)』の二枚のアルバムを発表するが解散した。
　その後も、数度再結成され、ギターのマーク・ファーナーはソロ活動のためにバンドを離れたが、現在もマーク・ファーナーも、 Grand Funk Railroadも、ともにライヴなどの活動を行っている。

ハードロック論　What's Hard Rock?

1．ロックの定義

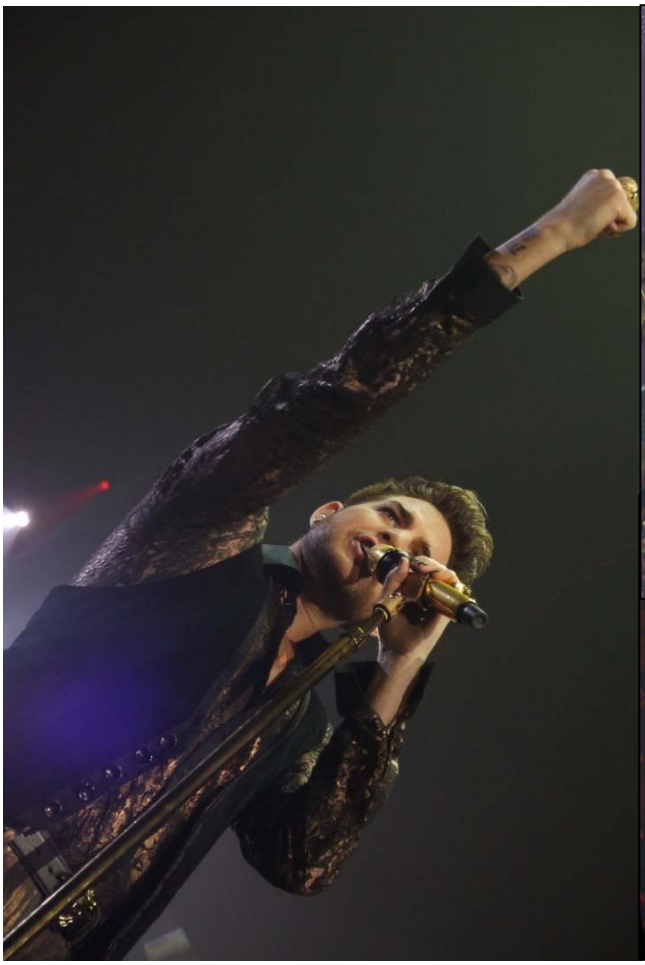
　ロックという音楽の分類は、今一つ不明確だ。そもそも、ロックのルーツは、リズム・アンド・ブルースやカントリー・ミュージックから強い影響を受けた1950年代のロックンロール、ロカビリーにあるのだという。確かに僕が聞いていたロックには、随所にブルース的色彩のフレーズがあちこちに登場してくる。

　しかし、ロックはそれだけに留まらない。まさに様々なものを巻き込みながら転げる岩さながらに、ソウル、フォーク、ジャズやクラシック音楽など他の音楽分野のエッセンスを取り込み、成長していった。だからこそ、ロックのもつ多面性は、その後、様々な分野のロックを生み出しているのだ。

　サイケデリックロック、ハードロック、プログレッシブロックから商業ロック、パンクロックなど、各種の方面に発展していったロックという、そのカテゴリーに含まれる音楽は、かなり広い。

　であるが故、なおさらロックの定義が曖昧で、どこからどこまでがロックなのかがよくわからなかったりする。

　サブジャンルを簡単に上げてみても、ブルースロック、フォークロック、フュージョン、サイケデリック・ロック、プログレッシブ・ロック、グラムロック、ヘヴィメタル、パンク・ロック、オルタナティヴ・ロック、グランジ、ブリットポップ、インディー・ロック、ポップ・パンク、ラップロック（ミクスチャー・ロック）、ラップ



QUEEN + Adam Lambert　2014年7月　バンクーバーライブ
息子撮影

メタル、ガレージロック/ポストパンク、シンセポップと、実に多彩だ。こうなると、いま巷に流れている音楽のほどんどがロックの分野に分類されてしまうことになる。

2．ロックといえばハードロックだ！

しかし、ここで僕がロックと呼びたいのは、60年代後半から70年代に全盛を迎えたハードロックだ。10代から20代にかけて、ずっぽりとはまっていたロック、いわゆる「ブリティッシュ・ハードロック」こそ、ロックと呼ぶにふさわしい。

ちなみに、ロックに様々なサブジャンルが派生しているため、ハードロックは、ヘヴィーメタルと称されているが、その分類にはどこか違和感を感じてしまう。ヘヴィメタは、あくまでもハードロックの後継機種的音楽であり、むしろ、ハードロックの一面を突き詰めて行った狭い分野でしかないのではないか。だからこそ、それらは厳格に区分されるべき分野なのである。

確かに、今現在ロックに分類される音楽を聴くと、それってポップスだよねというのが多い。歌謡曲？というようなものもロックと称され、頭の固いおじさんにしてみると、うーん、ロックってそんなもんじゃないだろとか思ったりするのだが、まあ、いわゆるロックは、音楽的要素に加え、外に向かって飛び出していく精神的な要素も多々含まれるので、おおらかに許容してもいいのかもしれない。

3．ハードロックの系譜

ハードロックの起源とされるのは、ザ・フーの「マイ・ジェネレーション」や、Eric Clapton（エリック・クラプトン）、Jeff Beck（ジェフ・ベック）、Jimmy Page（ジミー・ペイジ）といった偉大なギタリストを輩出したヤードバーズの曲などだといわれる。さらに、クリームやジミ・ヘンドリックスは、だれもがハードロックの元祖だと認めるミュージシャンたちだ。

さらに、そこからポール・ロジャース率いるFree（フリー・英国）、マーク・ファーナー 率いるGrand Funk Railroad（グランド・ファンクレイルロード・米国）、アルバム「Look at Yourself（対自核）」収録のJuly Morningや「DEMONS AND WIZARDS（悪魔と魔法使い）」収録のEasy Livin（安息の日々）が、日本でも広く知られているUriah Heep（ユーライアヒープ・英国）なども草分け的なバンドとして誕生した。

1967年には、The Jeff Beck Group（ジェフベックグループ第一期）が、68年にはLed Zeppelin（レッド・ツェッペリン、英国）、Deep Purple（ディープ・パープル、英国）がデビューし、70年には、オジー・オズボーンが結成したBlack Sabbath（ブラック・サバス、英国）がデビューしParanoidで一躍有名になった。さらに、Deep Purpleがハードロックに転向し、世界的なハードロックブームが巻き起こった。

70年代には英国でQUEEN（クイーン）、RAINBOW（ブラックモアズ・レインボウ）、Judas Priest（ジューダス・プリースト）、ドイツでScorpions（スコーピオンズ）、オーストラリアでACDCが、また米国では、Blue Öyster Cult（ブルー・オイスター・カルト）やAerosmith（エアロスミス）、KISS（キッス）などのハードロックに分類される多くのバンドが活躍した。

4．ハードロックの亜流、プログレ

一方で早くから登場していたアメリカのCHICAGOや、その後に誕生したボストン、ジャーニー、フォリナー、TOTO、スティクスなどは、ハードロックと呼ぶにはややメロディアスなPOPS的要素をもったロックだったため、インダストリアルロックというカテゴリーに含まれている。

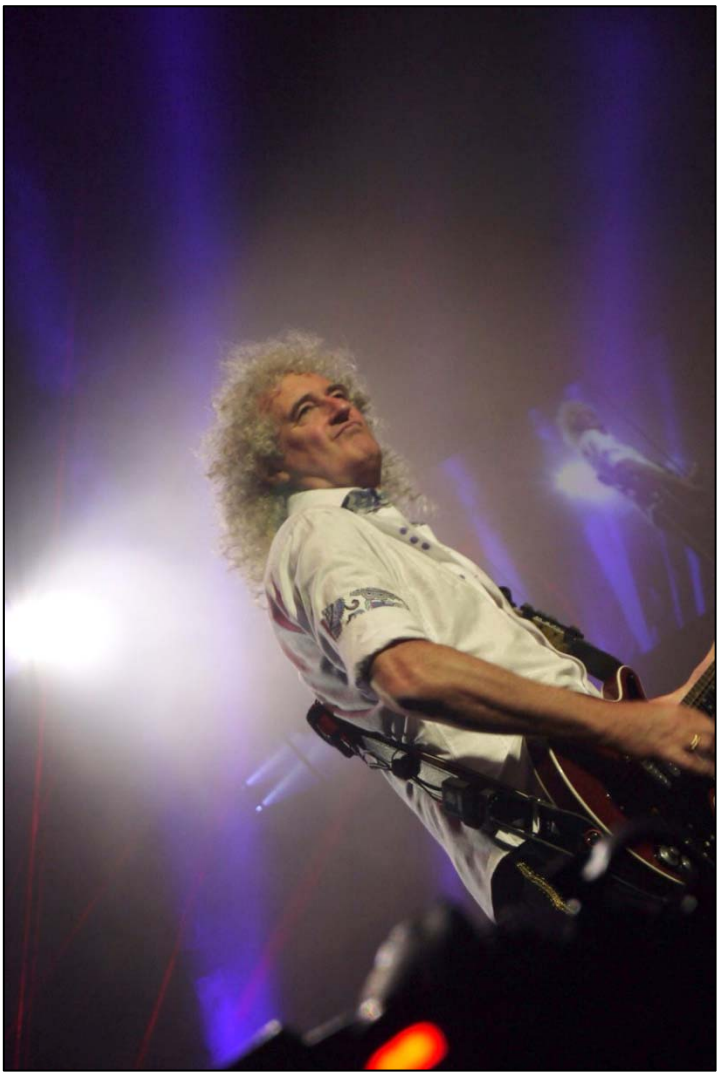
他方、ハードロックとの境目が曖昧で、同様に人気のあったのがプログレッシブロックだ。前衛的あるいは先進的（プログレッシブ）・実験的な音楽で、ロックを軸足に、そこにクラシックやジャズなど、その音楽のアプローチや演奏法、スピリットを取り入れようとしたものと評されている。

代表バンドは何といってもKing Crimson。69年に発表されたアルバム『21stCentury Schizoid Man』は、そのジャケットのインパクトも含め、とても印象深い。さらに、65年に結成され『原子心母』（70年）や『狂気』(72年）でその地位を確立したPink Floyd（ピンク・フロイド）、69年に結成されたYes（イエス）、70年に結成され日本でも「展覧会」の絵などNHKでもライブ放送されるほどの有名バンドとなったEmerson, Lake & Palmer（エマーソン・レイク・アンド・パーマー）、そして67年に結成され、71年に発表された『Nursery Cryme』（怪奇骨董音楽箱）が有名となり、後にフィル・コリンズが加わり80年代も活躍したジェネシスなど、有名なバンドが目白押しだった。

5．ハードロックの終焉

ハードロック、プログレッシブロックなど、10代から20代にかけていつも近くにあった音楽、それを奏でたバンドの多くが、その後さまざまに形を変え、今に至っているが、近年、Deep Purpleのジョン・ロード、Yesのクリス・スクワイヤー、EL＆Pのキース・エマーソンとグレッグ・レイクが相次ぎ他界するなど、ハードロックのレジェンドたちも過去となりつつあるのが寂しい限りだ。

多くのミュージシャンが歳を取り、現役でライブをする機会も今後少なくなるだろう。その意味でハードロックは、いま終焉に向かいつつあるといっていいのかもしれない。当時胸をわくわくさせながら毎日聞いていたあの音楽たちが、再び現役で前面に再浮上することはないのかもしれない。しかし、このハードロックのDNAは、しっかりとその後継のロックの中に、今も、そしてこれからも生き続けるのだ。



QUEEN + Adam Lambert　2014年7月
バンクーバーライブ　　息子撮影

4. プログレッシブロック・インダストリアルロック

ハードロック全盛時代を迎えた頃、同時にその亜流ともいうべきプログレッシブロックの人気も全盛を迎えようとしていた。だから、当時の多くのロック少年は、ハードロックとプログレッシブロックをあまり意識なく同時に楽しんでいたのではなかっただろうか。

プログレッシブロックとは、ロックというジャンルにとらわれることなく、他ジャンルの影響を反映した、前衛的あるいは先進的（プログレッシブ）・実験的な音楽といえる。クラシックやジャズなどの要素を多く取り入れた楽曲は、ハードロックよりも複雑で、多様性を秘めていた。

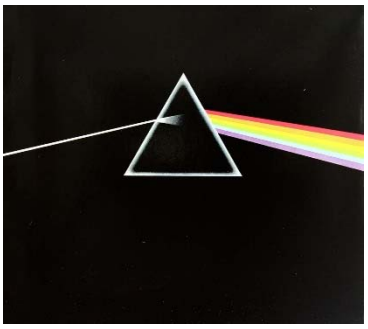
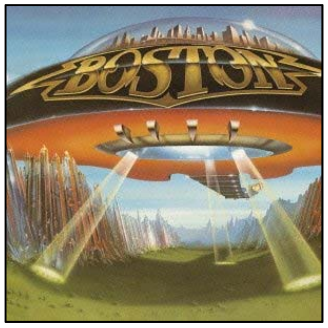
たとえば、King Crimsonという、プログレッシブロックの最高峰といわれたバンドは、そのアルバムジャケットともに、ファーストアルバムの強烈な印象が頭の中に記憶されているし、Pink Floyd、Yes、EL&P（エマーソン・レイク・アンド・パーマー）、Genesisなど60年代後半に登場し、70年代前半に大活躍したプログレッシブロックバンドは、それぞれ個性的で、大層魅力的だった。

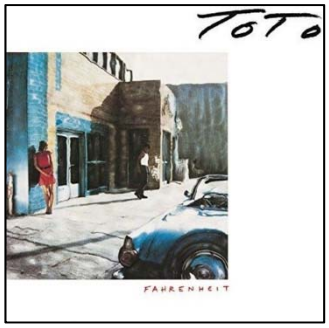
一方、70年代半ばからは、アメリカでもアメリカン・プログレ・ハードと呼ばれるバンドが多く台頭した。このジャンルには、BOSTON、Kansas、Journey、Styx、Foreigner、TOTOなどが掲げられている。しかし、80年代になると、これらの多くのバンドは、プログレハードから転換し、かなりバラード的でメロディアスなヒット曲を生み出したため、インダストリアルロック（商業ロック）との批判も多かった。

70年代にロック少年だった僕も、80年代前半には、これらの商業ロックの耳当たりの良さに、ハードロックの魂を売り飛ばし(笑)、すっかりこれらの心地良い曲を多く好んで聞くようになった。

Kansasの”Dust In The Wind”、Foreignerの”Waiting For A Girl Like You”、 Journeyの”Open Arms” 、TOTOの”Africa”などは、今聞いても十分に聞くに値する素晴らしい曲たちだ。

この時期から、僕の音楽的指向も、より広くハードロック以外にも向かうようになった気がする。

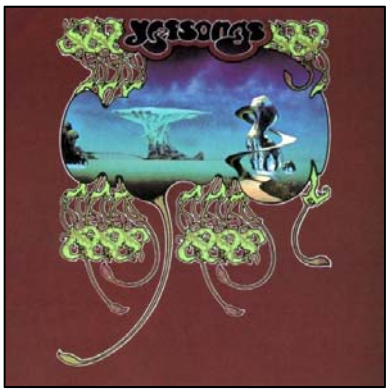





2014.11.23東京ドームシティ
Yes　こわれもの完全再現コンサート

Roundabout（YES）

　ロックに嵌ると、いろいろな分野のロックを聴いてみたくなる。ブリティッシュハードロックから始まった僕のロック遍歴は、さらにアメリカンロックやプログレッシブロックに向かうことになる。プログレッシブロックといえば、King Crimsonの”21st Century Schizoid Man”やEL&P(Emerson, Lake & Palmer)の”PICTURES AT AN EXHIBITION”（展覧会の絵）、”BRAIN SALAD SURGERY”（恐怖の頭脳改革）は、本当にすごかった。
　個人的にはもう少しメロディアスな曲が好きだったので、中学から高校時代によく聞いたのがYESだった。
　1963年に結成され、幾度かのメンバーチェンジを繰り返したが、『こわれもの』、『危機』といった代表作当時のメンバーがやっぱりすごい。
　クリス・スクワイア、ジョン・アンダーソン、ビル・ブルーフォード、スティーヴ・ハウ、リック・ウェイクマンと、錚々たたるメンバーだ。
　YESの本領を発揮したのが、『Yessongs』という73年に出たライブアルバム。プラチナを取った『こわれもの』、『危機』の中から演奏され、多くのYesファンをうならせた。
　『こわれも』からセレクトされた“Roundabout”が僕にとってのYes No.1 ソングだ。スティーブ・ハウのアコスティックギターのハーモニックスが心にしみ入るイントロで始まり、一転、クリス・スクワイアの唸るベースやリック・ウェイクマンの神秘的なメロディーのキーボードが絡む、多彩な名曲として知られる。



　その後、多少のメンバー交代がありつつ、『海洋地形学の物語』、『リレイヤー』、『究極』、『トーマト』と78年まで、アルバムを次々に発表していくが、80年に『ドラマ』というアルバムを発表した後、活動を停止してしまった。
　83年に再結成されたYesは、その後メンバーチェンジや分裂を繰り返すも、現在に至るまで、活動を続けている。
　しかし、14年に来日した際には元気にこの曲を聞かせてくれたYesというバンドの代名詞、クリス・スクワイヤーが、15年に急逝。彼が今は亡き人だというのが、とっても悲しい。

2014.10.09東京武道館
BOSTON　来日ライブ

More Than a Feeling（BOSTON）

　中学時代にブリティッシュロック一辺倒だった僕が、Grand Funk Railroadというアメリカのハードロックバンドを知ってから、多少泥臭いアメリカのロックにも引かれていった。
　まずはEagles。1974年に大ヒットした”Desperado”（ならず者）は、今でもあちこちで聞く名曲だ。さらに、75年には”One Of These Nights”（呪われた夜）、76年には洋楽に興味のない人でも知っている不朽の名作”Hotel California”が大ヒットし、日本中にその名前を轟かせた。
　70年に結成されたThe Doobie Brothersも、”China Grove”(73年）や”What A Fool Believes”(79年）は今でもCMなどに使われる有名ナンバーをヒットさせた。
　そんな中、76年に突然現れたのが、BOSTONだった。イギリス産のハードロックやプログレッシブ・ロックなどのサウンドを、アメリカ流のポップセンスで消化した「アメリカン・プログレ・ハード」の先駆者として知られている。
　マサチューセッツ工科大学卒のプロダクト・エンジニアという異色の経歴の持ち主であるトム・ショルツが創設したバンドであり、独特の高音ヴォーカルに、アコスティックとエレキの両方を融合させた、メロディアスな曲たちは、僕らの心を鷲掴みにしたものだ。

　76年、1stアルバム『幻想飛行』をリリースしたが、その１曲目、”More Than A Feeling”（宇宙の彼方へ）は、いまだにイントロだけでBOSTONだとわかるくらい有名で、彼らの曲の中では、最も好きな曲だ。
　78年、ツアーの合間を縫って慌ただしく制作された2ndアルバム『Don’t Look Bcak』も全米1位の大ヒットを記録。その後、完璧主義者のショルツのレコーディング作業はなかなか進まず、ボストンの活動は一時停止することになったが、8年ぶりの3rdアルバム『サード・ステージ』を83年に発表。シングル・カットされた「アマンダ」が全米1位を獲得した。
　その後もスローペースでアルバムを制作、94年に『ウォーク・オン』、02年に『コーポレイト・アメリカ』、13年、『ライフ、ラブ&ホープ』を発表している。

Open Arms (Journey)

　ハードロックからプログレロック、アメリカンプログレへと思考が変化していった結果、1980年代初頭には、その頃全米で人気を博した商業ロックに耳心地よさを求めたのは当然の帰結だった。人生の執行猶予を終え、学生から社会人への階段を上った時期、それまで感じたことのないストレスなんかも重なった過渡期。そんな時期だからこそ、ハードな部分を残しながら、メロディアスなバラッド風のバンドの曲たちが本当に心地よかった。

　その中でまず聞いたのがJourneyだった。81年発売の『ESCAPE』と83年発売の『FRONTIERS』の二枚は、日本でもとても人気のあるアルバムだった。

　日本では折しも山下達郎の「クリスマスイブ」や安全地帯の「ワインレッドの心」が発表された時期。もちろんそんな曲も聞いたのだけれど、その当時の僕としては、やはりJourneyは心地が良かった。

　『ESCAPE』に収められた曲では、“Don't Stop Believing”が有名だ。近年でも、この曲は米国の若者向けドラマ『glee』でも取り上げられるなど、とても人気の高い曲だ。

　しかしJourneyといえば、同じアルバムに収められた”*Open Arms*”ではないだろうか。

美しいピアノのイントロにスティーブ・ペリーの甘い歌声が重なる、ラブバラードだ。サビの部分の”So now I come to you with open arms Nothing to hide, belive what I say So here I am with open arms Hoping you'll see what your love means to me Open arms”という歌詞。これでもかというほどベタなラブソングだ。でも、僕はそんなラブソングが好きだ。愛の告白は、ベタがカッコいいと思う。

　Journeyは、73年に結成されたアメリカのバンドだが、78年にボーカルのスティーブ・ペリーが加わりよりポップ路線になったといわれるが、彼の伸びの良いヴォーカルは、Journeyの全盛時代を築き上げたといえるだろう。

　その後、84年に一旦活動を休止したが、10年後の96年に再結成し、現在もフィリピン人シンガーのアーネル・ピネダをリード・ボーカリストに迎え活動を続けている。

I Won't Hold You Back （Toto）

1980年代に一世を風靡したROAのTotoを、僕は何故か78年にリリースされたファーストアルバム“TOTO”から聞いていた。何故TOTOと出会ったのか、実はよく覚えていない。このアルバムに収められていた”Hold the Line”がなかなか良い曲だったので、よく聞いたということだったのかもしれない。

Totoは、77年にロサンゼルスでスタジオミュージシャンをしていたデヴィッド・ペイチとジェフ・ポーカロ を中心に結成された。Totoというバンド名には、諸説あって、日本では陶器メーカーのTOTOから取ったとする説が良く知られているが、 どうやらそれは冗談に過ぎず、『オズの魔法使い』に登場する犬の名前「toto」がラテン語で「total」 、あるいは「all-encompassing（網羅的な）」を意味することから採用されたとするのが最も有力である。ほぼ同時期にデビューしたBoston と並んで、この後1980年代のアメリカン・ロック・サウンドの雛形となったサウンドを提起した。

日本では、1982年に発売されたアルバム『Toto IV』は、全米4位を記録した大ヒット・アルバムで、グラミー賞で、レコード・オブ・ザ・イヤーやアルバム・オブ・ザ・イヤーといった主要部門も含む6部門を受賞した名作集だ。その中からシングルカットされた”Rosanna”（米国でもビルボードチャートで2位にランクインされている。）や、”Africa” は、全米ではとても人気になった曲だった。さらに86年にリリースされたアルバム『Fahrenheit』や88年の『The Seventh One』（第七の剣）にもヒット曲満載だ。全体的にマイケルジャクソンっぽい？って当時思ったけれど、実際にTotoは彼に曲を提供したりアルバム制作に協力していたらしい。

そんな中で一番良く聞いたアルバムは、やはり『 Toto IV』だ。この中に収録された”I Won't Hold You Back”は、秀逸なバラード曲。しっとりとしたボーカルが切々と響くオススメの一曲なのである。

Will You Still Love Me?（Chicago）

通い詰めた志賀高原一ノ瀬スキー場のゲレンデで、Chicagoの” 25 Or 6 To 4”（長い夜）が何度も流れていたことが、僕のロックへの入門だったことはすでに述べた。では、その時にそのままChicagoに嵌ったかといえば必ずしもそうではなかった。

再びChicagoを聴くようになったのは、もう少し時代が下ってからのこと。1980年以降のChicagoはいわゆるAOR的な曲を書き始め、82年には、”Hard to Say I'm Sorry”（素直になれなくて）をヒットさせた。

69年にロバート・ラム、テリー・キャス、ジェイムズ・パンコウ、ウォルター・パラゼイダー、リー・ロックネイン、ダニー・セラフィン、ピーター・セテラ等のメンバーで出発したChicagoは、その後メンバーの入れ替えを何度か行い、84年にはマルチ・プラチナ・アルバムである『 Chicago 17』を発表。AORの押しも押されぬ代表バンドとなったが、僕が良く聞いていたのは、86年にリリースされたアルバム『 Chicago 18』と『 Chicago 19』だった。

『 Chicago 18』は 1曲目の” Niagara Falls”はなかなか格好いいドラマティックな曲に仕上がっている。話題となった最新の技術でのリメイクバージョン” 25 Or 6 To 4”は、残念ながらチャートを登ることはなかったが、新しい解釈を施したアレンジがなかなか良い、好きな曲の一つだ。

『 Chicago 19』も、”We can last forever”や”What kind of man would I be”といった快適な曲が並ぶ名盤だ。

だけど、やっぱり一番好きなのは、 『 Chicago 18』の”Will You Still Love Me？”だ。この曲はチャートの3位を記録したバラード曲であり、恋を歌ったChicagoの曲の中でも秀逸な曲だといえる。このアルバムから参加したベース兼リードボーカルのジェイソン・シェフの歌声が、バンドのきらびやかな演奏にとてもマッチした、大人の仕上がりになっている。

5. フォーク＆ロック（邦楽）

中学時代にあんなにどっぷりとブリティッシュハードロックに嵌っていた僕も、高校時代になると、その音楽の嗜好ががらりと変化する。一番の理由は、一週間で退部したテニス部の後に入ったのが、フォークソング部だったからだ。当時は軽音楽部などなく、バンドを組むには、メンバーもいなかったので（その後、あちこちで部活に関係なくバンドを組む奴らが出てきて、その中には、現在プロのミュージシャンとして活躍する溝口肇や山内薫などもいた。）、地味に、昔のフォークソングを同期とやったりしていた。

フォークソングといえば、小室等率いる六文銭、吉田拓郎、泉谷しげる、赤い鳥、かぐや姫などが有名だが、当時の高校生には、アリス、猫、ガロ、風、バンバンなどが流行っていた記憶がある。僕的には初期の頃のオフコースとかアコスティックなガロが好きだった。

もう一方の日本的ロックといえば、はっぴいえんど、はちみつパイ、サディスティックミカバンド、カルメンマキ＆OZ、四人囃子などが流行っていただろうか。そういえば、ミカバンドの「タイムマシンにおねがい」は、ぶっ飛んで好きだったし、「黒船」も好きだった。四人囃子の「一発触発」や「空飛ぶ円盤に弟が乗ったよ」も結構好きでよく聞いたものだった。

そういえば、70年代は、Deep Purpleのコピーバンド紫なんていうのもいた気がする。ロックンロール系だとキャロル（矢沢永吉のバンド）や、ダウンタウンブギウギバンドが出現し、他にも頭脳警察、ギタリストのCharなどが活躍した時代でもある。

その後は、フォークとロックの融合的音楽を好んで聞いた。例えば、キャラメルママ（ティンパンアレ）、シュガーベイブ、ブレッド&バターなどだ。これらの音楽がやがてニューミュージックに変化していったのだろう。

フォークソング部では、地味にかぐや姫の「加茂の流れ」とかグレープの「精霊流し」とかチューリップの「心の旅」（なぜかピアノを担当）をやった。好きだったというよりも、これをやろうといわれ、まあいいかという感じだったので、そのうちにすっかり飽きて、ソロで因幡晃の「わかってください」や、その後のニューミュージック（後述）に分類されるオフコースの「雨の降る日に」、ユーミンの「花紀行」などとともに、自作の曲を何曲か歌った。

そういえば、部活の同期には、ニッポン放送のアナウンサーになった石川みゆきがいた。

タイムマシンにお願い（ｻﾃﾞｨｽﾃｨｯｸﾐｶﾊﾞﾝﾄﾞ）

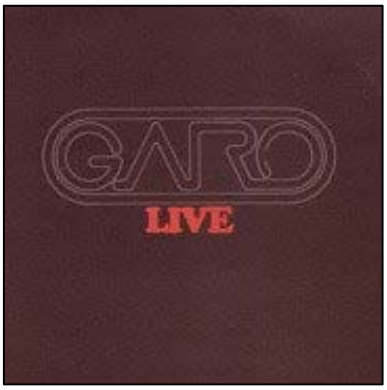
　サディスティックミカバンドを初めて聞いたのはラジオ番組だったかと思うが、今となってはきちんと思い出せない。軽快なブギウギの「サイクリングブギ」が印象的だったことだけはよく覚えている。2年後にダウン・タウン・ブギウギ・バンドの「スモーキン‘ブギ」が出たときには、なんだ完全にパクリじゃないかって思ったほどだ。
　このバンドは、1971年11月、元ザ・フォーク・クルセダーズの加藤和彦を中心に、加藤ミカ、つのだ☆ひろ（すぐに脱退。後にYMOの高橋幸宏が参加）、高中正義で結成され、72年にシングル「サイクリングブギ」でデビューした。
　ミカバンドといえば、74年に発表されたセカンドアルバム『黒船』。いまだに日本ロック史上、このアルバムを越えるものは出ていないのではないかというほどの名盤だ。特にインストラメンタルで繰り広げられる「黒船（嘉永六年六月二日、三日、四日）」の3曲は、メロディーラインも美しくまた恰好いいし、なんといっても高中正義のギターが冴えている。
　でも、好きだったのは『黒船』に収録された**「タイムッマシンにお願い」**。これも日本ロックの名作中の名作だ。松山猛と加藤和彦の詞曲コンビの抜群の和洋折衷センスが光る珠玉の一曲。そして、とにかくミカさんが恰好よかった。
　ミカバンドは、加藤和彦、ミカ夫妻の離婚を機に『HOT! MENU』を最後のアルバムとして発表した75年に解散してしまったけれど、後に木村カエラを迎えたSadistic Mikaela Bandでも歌われた。これはこれでありかなと思った。

空飛ぶ円盤に弟が乗ったよ（四人囃子）

　日本でハードロックというと、Deep Purpleにインスパイアされた紫というのがあったが、コピーバンド的な存在で、あまり聞く気にはなれなかった。そんな中、四人囃子は、自作の曲を引っ提げて登場した日本には珍しいハードロックバンドだった気がする。
　1971年に岡井大二（リーダー、ドラムス）、森園勝敏（ヴォーカル、ギター）、坂下秀実（キーボード）、中村真一（ベース）の4人で結成されたバンドだが、 1974年にアルバム『一触即発』を発売して本格的にメジャー・デビューしたらしい。
ハードなロックの楽曲に、日本語の詩を乗せると、なんだかすっかり腰砕けになるのだが、彼らの曲だけは、日本語を融合する不思議な感じが面白かった。しかも長い曲があるのが面白くて、「一触即発」、「おまつり」、「泳ぐなネッシー」などの曲は気が向くと聞いたものだ。
　そんな中で一番記憶にあるのが75年にシングルで発売になった**「空飛ぶ円盤に弟が乗ったよ 」**だった。今はCD化された『一発触発』の中にフューチャーされている。
　「星も出ていない夜に 弟と手をつないで 丘の上に 立っていると 音もなく 静かに 銀色の円盤が 空から 降りてきたのさ」という奇妙な歌詞が、なんとも面白かった。その後、四人囃子は、日本を代表するプログレッシブロックバンドへと変身を遂げるのだが、やっぱりロック少年だった僕には、初期の頃の彼らの作品にとても思い入れがあった。

心もよう（井上陽水）

　井上陽水については多く語る必要はない。彼をどのジャンルに区分するか、かなり迷うところだ。フォークなのかニューミュージックなのか、はたまた歌謡曲なのか。でも、僕の音楽史上、重要な人なのだ。
　最初に聴いたのは1973年のシングル「心もよう」。「少年時代」も好きだけれど、陽水といえば**「心もよう」**を思い出すほど聞き込んだ、思い出の曲だ。ちなみに、中学時代バンドを一緒にやった川島裕二が、陽水の『あやしい夜をまって』以降のアルバムの作成や編曲に加わるとは思っても見なかったことだった。



美しすぎて（GARO ）

　この時代のフォークソングは、好きだったかといえば、あまり好きではなかったと言わざるを得ない。でも、ギターを練習するには、そんな曲たちをコピーして演奏するぐらいしかなく、まあ、仕方ないって感じだっただろうか。
　そんな中で、これだけはやってみたかったなあと思うのが、GAROの「美しすぎて」という曲だ。
　GAROというと、「学生街の喫茶店」が一世を風靡し、歌謡フォーク的に扱われてしまったちょっとかわいそうなグループだった気がするのだが、彼らの実力は、きっと当時では抜群にうますぎて、その腕よりもルックスだったり万人受けする曲が流行ってしまったのが悲劇だったのかもしれない。
　1970年から76年まで活動した日本のフォークロックグループとして紹介されるGAROだが、 71年に発表されたデビューシングル「たんぽぽ」を聴けば、当時のフォークグループとは一線を画していたのがよくわかる。CSN&Yに影響を受けたその志向は、しかし、当時あまり受けなかったようだ。
　翌年には、セカンドアルバムからカットされた「美しすぎて」が発売になった。この曲は、ライブに限る。美しいギターサウンドに美しいハーモニーが重なる、今聞いても素晴らしい曲だ。GARO不屈の名作ともいわれ、いまだにフォーク好きの人の間では演奏される。
　ちなみにそのB面に収められていたのが「学生街の喫茶店」。73年2月19日付けのオリコンのシングルチャートで1位に浮上、4月2日付けのチャートまで7週連続1位という大ヒットとなった。B面の方が売れてしまったのがGAROの悲劇だった。「ロマンス」をヒットさせたものの、商業フォークグループとしての評価から抜け出せないまま76年に解散することになった。

あの頃のまま（Bread & Butter ）

　高校時代は、良く授業をさぼって湘南に遊びにいった。何しろ、町田駅から高校方面へ行く電車に乗ろうとホームで待っていると、ちょうどその時間、反対側のホームには江の島行きの急行が入線してくるのだ。そんなとき、朝のつまらない授業のことを考えると、ついつい友人と顔を見合わせて、無言のまま向かい側の電車に乗り込んだ。
　江の島から鎌倉までのテリトリーには、ワクワクする未開の物がたくさんあって、とにかく魅力的だった。そのなかに今はもう店を閉じてしまったJIROという喫茶店があった。カウンターに座ってコーヒーを頼むと、マスターらしき人が「君たちはまた学校さぼっているのか」とあきれ顔で珈琲を出してくれた。その店で良く流れていたのがブレッド&バター。サザンオールスターズはまだデビューしていなくて、湘南サウンドといえば加山雄三かブレッドアンドバターだったのだが、加山雄三なんておっさん臭いものは聞きたくなかったから、まさに、ど真ん中ストライクのブレバタがお気に入りだった。
　ブレッド&バターは、1969年にデビューしたフォークグループ。確かにフォークソングに分類される彼らだが、そのサウンドは、明るくからっとしていて、とても心地がよかった。代表作には「ピンクシャドー」、「マリエ」、「あの頃のまま」、「Monday Morning」、「君がいた夏」などあれこれあった。「特別な気持ちで」はスティービーワンダーの名曲 “I Just Called To Say I Love You“をカバーしてヒットした曲だった。
　そんなブレバタの一番好きな曲は、『Late Late Summer』に収録されている「あの頃のまま」。社会人になってしばらくたった頃、ライターの親友と会って語り合ったことがあった。サラリーマンの漠然とした不安を持っていた僕は、僕以上に様々な不安を抱えた彼の話を聞きながら、なるほど、それはまるで「あの頃のまま」の歌詞と同じだと思った。「幸せの形にこだわらずに人は生きていくのだから」の歌詞がいまでも、心に滲みる名曲である。

6. フォーク＆ロック（洋楽）

一方で、日本のフォークソングのベースになった海外のフォークソングにも興味を持った時代があった。

最初に聴いたのは、スコットランドのシンガーソングライター、ドノヴァンだっただろうか。ロックを聴き始めた小学校高学年の頃だった。ギター1本で歌っていたドノバンは、ジョン・デンバーを彷彿とさせたが、その後、バンドを従えフォークロック方面へ転身していったらしい。ちなみにドノヴァンのバックバンドには、あのレッド・ツェッペリン結成前のジミー・ペイジ、ジョン・ポール・ジョーンズ、ジョン・ボーナムやジェフ・ベックなどが参加していたらしい。

高校時代になると、フォークソング部の先輩の影響で、CSN&Yをよく聞いた。日本でも「小さな恋のメロディー」の挿入歌“Teach your children”などを発表し、人気になったグループだ。

また、サイモン＆ガーファンクルは広い世代に聴かれたフォークグループで、ギター練習のために何曲かコピーしたものだ。

さらに、最近ノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランも時々聞いた。しかし、僕らは、ボブディランのバックバンドからスタートしたThe Bandのアメリカンフォークロック（あるいはカントリーロック）に親しんだ時期があった。

イーグルの初期の楽曲は、フォーク＆ロック、いわゆるカントリーミュージックの色彩が色濃かった。彼らの代表作“Take it easy”は、ジェームス・テイラーの手によるものだが、その軽快な曲調は、日本のじめっとしたフォークソングとはやはり違っていい感じだった。

さらに、フォークやロックのようでいて、でも、どこか独特の世界観を放っていたライ・クーダーなどを聴いた記憶がある。これらは、僕にとっては決してメインではなかったけれど、高校大学、さらに社会人になってしばらくの間、常にどこかにあった音楽たちだった。

さらに、僕たちが野遊びをしていた時代、ブルース・コバーンというカナダ出身のシンガー・ソングライターを親友が見つけ出してきて、初期の頃のアコスティックな曲をよく聞いていたものだった。彼のアルバム『Salt Sun & Time』と『 High Winds White Sky』はヘビロテしたアルバムだった。透明感のある曲たちは、あの時代のBGMとしては本当に最適だったなあと今でも思うのである。

Teach Your Children （CSN&Y）

高校1年の後半に「グループを組もう」と先輩に言われて、聞かされたのがCSN&Yの『Déjà Vu』 だった。スティーヴン・スティルス、デヴィッド・クロスビー、グラハム・ナッシュの3人で結成したCS＆Nが母体となって結成され、そこにニール・ヤングが加わりCSN&Yになったアメリカのフォーク・ロックグループだ。

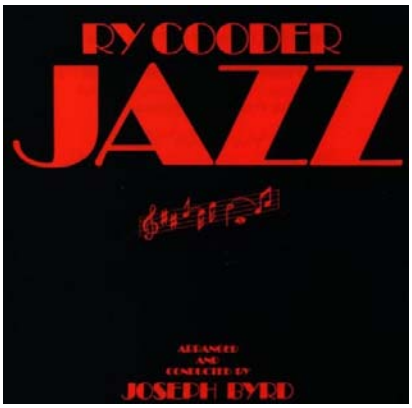
練習したのはA面一曲目の”Carriy on”とアコスティックギターのフレーズがいかす”Ohaio”。あのGAROがカヴァーしていたらしい。

好きだったのは、71年の映画『小さな恋のメロディ』に使われた”Teach Your Children”だった。みんな聞いたことあるはずの曲だ。

THE WEIGHT （The Band）

The Bandは、作家で親友の駒沢敏器が高校時代に、うれしそうに教えてくれたバンドだった。大学時代に良く行ったミュージックパブ「ビックピンク」でもよく聞いた。

カナダ人のロビー・ロバートソンを中心にボブディランのバックバンドとして活動していた4人が、1967年に結成。南部の煮込み料理やバーボン･ウイスキーの味わいを感じる土着的な深いサウンドが人気を博す。『Music From Big Pink』収録の”THE WEIGHT”は、なじみやすいメロディ、アメリカ臭い音、地味ながら壮大さを感じさせる曲調の名作だ。



Big Bad Bill Is Sweet William Now （ Ry Cooder ）

あちこちキャンプして歩いた20代後半には、Ry Cooderのアルバムがいつも車の中で流れていたものだった。16歳でプロミュージシャンになった彼は、70年にアルバム『ライ・クーダー・ファースト』でソロ・デビューを果たした。『Into the Purple Valley』、『Chicken Skin Music』、『Jazz』、『Paris, Texas』などのアルバムは、日本でも有名だが、米国の古いトラディッショナルソングを様々な形にリニューアルして、並べて見せた彼の功績は大きい。一番聞いたのは『JAZZ』の一曲目”Big Bad Bill Is Sweet William Now“だった。

Solt, Sun and Time （ Bruce Cockburn ）

八ヶ岳をベースに、アウトドアライフを楽しんでいた僕たちにぴったりだったのが、カナダオタワ生まれのシンガーソングライター、ブルース・コバーンだった。

1970年にソロデビューして、数作はアコスティックギターを中心とした曲を集めたアルバムを出していた。2作目の『High Winds, White Sky』は、雪の日の情景を奏でた秀逸な曲集だ。邦題も「雪の世界」とされていた。透明感ある秀逸な曲集だ。まさに雪遊びの日に聴くにはうってつけのアルバムだった。

そして5作目の『Solt, Sun and Time』の表題曲は、ギーター1本で奏でられるインストルメンタルの傑作。 『High Winds, White Sky』ほど内向きに閉じてはいないが、静かに揺蕩う心象風景を模写したようなその美しい旋律とギターテクニック。聞くものの心をすっかり虜にすること間違いない。

ブルース・コバーンは、その後、政治問題などを中心に歌い続けているらしい。

いずれにせよ、青春の一時期、贅沢な時間を過ごしたあの頃の自然の美しさを歌った名曲たちを、また再び八ヶ岳の自然の中でまた聴いてみたいものだと思った。

7. ニューミュージック（邦楽）

1970年代から80年代にかけて流行した、日本のポピュラー音楽のジャンルの一つを当時ニューミュージックと誰もが呼んでいた。従来のメッセージ性の強いフォークソングからは一線を画し、そこにリズム的にロックなどの要素を加え、都会的な情景を織り交ぜたポップ調のサウンドを基調とする音楽を、そう呼んでいた気がする。

吉田拓郎の「結婚しようよ」からが始まりだとされる向きもあるようだが、やっぱりニューミュージックといえば、ユーミン、オフコース、チューリップ、山下達郎などが掲げられるのではないだろうか。

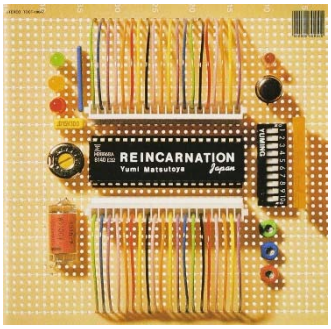
僕的には、スタートを73年に結成されたグループ、シュガー・ベイブあたりに求めたい。山下達郎や大貫妙子などを中心に結成されたグループだが、名曲“Down Town”などは、当時日本の音楽シーンにあって、とても新しく、明るくて素敵な曲だった。キャラメルママ（細野晴臣、鈴木茂、林立夫、松任谷正隆で結成され後にティン・パン・アレーに改名）や前身ともいえるはっぴーえんど（もう少しロック寄りだった。）と並んで好きなバンドだった。

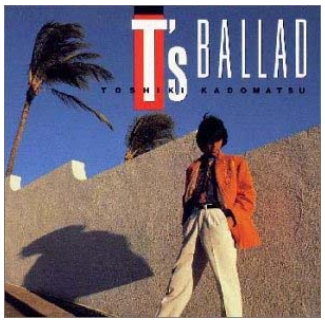
76年に高校でフォークソングに入部し音楽を始めた僕にとっては、そんなバンドたちの曲を演奏するテクニックもなく、地味にグレープの「精霊流し」やかぐや姫の「加茂の流れに」などを歌っていたけれど、実際には、ユーミン、大瀧詠一、オフコース（そしてフォーク色の強い時代のガロ）を好きで聞いていた気がする。

高校二年の時には、オフコースやユーミンの曲に加えて自分で作詞作曲した曲を数曲歌ったけれど、やっぱりフォークソングよりもニューミュージックの方が好きだった。

大学以降は専ら聞く方専門になってしまったが、この分野の音楽としては、山下達郎、竹内まりや、浜田金吾、サザンオールスターズやスターダストレビューなどを聴いてきた。

中でも、ユーミン、オフコース、スターダストレビューは今でも聞き続け、さらに、現在、同級生の山内薫君がバックでベースを務める角松敏生は、デビュー当時から今に至るまで、すべてのアルバムを購入し、何度もライブにも参戦するほど、すっかり嵌っている。





花紀行（荒井由実 ）

　ユーミンの曲は、あれもこれもよく聞いた。
　そもそも、1973年発売の『ひこうき雲』から『MISSLIM』、『COBALT HOUR』、『The 14th Moon』までのアルバムは、姉貴が持っていたので、ハードロックを聴く傍ら、いつもそばで流れていた記憶がある。
　加えて、高校時代には、ユーミンのコピーバンドをしていた一つ年上の先輩たちがいたので、曲の細部の作りまで、荒井由実時代の曲中心になんとなく知る機会が多かった気がする。でも、ライブに行ったわけでもなく、テレビに出ないニューミュージックのミュージシャンとして有名だったので、最初はただ単に曲を知っていたという感じだったか。
　そのうち目の前にあるフォークソングに辟易しので、ユーミンの曲を自分で数曲ギターで引き語りをしたけれど、それでもやっぱりユーミンはもっぱら聞くことが専門だった。
　その後、ユーミンをちゃんと聞くようになったのは、 82年の『PEARL PIERCE』 からだったか。そこから90年にリリースされた『天国のドア（THE GATES OF HEAVEN）』までのアルバムをいまだに持っている。
　一番嵌った時代は、85年にリリースされたアルバム『DA・DI・DA』の頃。

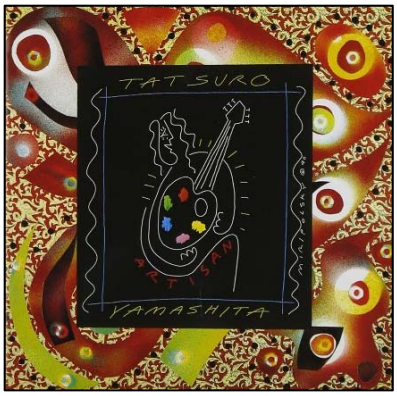
　この年は、逗子マリーナ、苗場の『SURF＆SNOW in Naeba』、そして武道館コンサートを全制覇した。
　でも、正直に言うと、当時はユーミン、の曲は好きだったけれど、ユーミンが見たかったわけではなく、バックコーラスの大滝裕子を見に行ってたというのが正解かもしれない。大滝裕子は87年に、女性3人のコーラスグループAMZONSを結成し、いまだに活動を続けるとともに、各種アーティストのコーラスをしている。美人だったとか、可愛かったとかそういうのではなく、彼女の声がなぜか大好きだった。
　ユーミンに話を戻すと、彼女のたくさんある作品の中で、好きなのは初期の作品。「ひこうき雲」、「海を見ていた午後」など選べないほどにたくさんの曲が好きなのだが、でも、あえて一曲だけというならば、75年発表の『コバルトアワー』に収録された「花紀行」だろうか。

オフコースなどを一人で歌った最後のステージ。

生まれ来る子供たちのために（オフコース ）

　オフコースを初めて知ったのは、高校一年の時。フォークソング部の入部したての頃、恭子先輩が教えてくれた。『ワインの匂い』という、前年に出たばかりのアルバムだった。それまで聞いていたフォークソングとは一線を画すような、ハーモニーの素敵なグループだった。特に、アルバム一曲目の「雨の降る日に」と3曲目の「眠れぬ夜」は、その頃の自分の心情にとても良くフィットしていて、すぐさまこのアルバムをレコード屋に買いに行くことになった。
　オフコースは、1970年にデビューした小田和正、鈴木康博などで結成されたフォークグループだった。73年の「僕の贈りもの」は、牧歌的でありながら歌詞の良さが際立っていた。75年のアルバム『ワインの匂い』、77年の「秋の気配」、79年の「愛を止めないで」を経て、ニューミュージックの旗手へと変身を遂げて行った。
　僕自身は、べたなフォークソングがあまり好きではなかったために、同期の男子で結成したグループからもすぐに抜けてしまい、オフコースの「雨の降る日に」なんかをソロで歌ったりしていた。なぜか当時はオフコースがよりどころだった。結局、高校2年の秋には写真部へ移籍した。

　オフコースは、79年にそれまでの二人から、松尾・清水・大間を、正式にメンバーに加えバンド編成を取るようになる。79年の「さよなら」、80年の「Yes –No」は、この編成のオフコースから生まれた。
　80年に発表されたYes-Noを含むアルバム『We are』は、初めてオリコンチャートで1位を獲得する。「時に愛は」から「きかせて」まで、とても良い曲が多い。
　81年にはアルバム『Over』を発売。オフコースの絶頂期だった。この2枚のアルバムは、何度も聞いたものだった。
　そんなオフコースの曲の中には大好きなものが多い。いまでも時々口ずさむのが79年に発売されたアルバム『Tree and tow』に収録された**「生まれ来る子供たちのために」**だろうか。『Over』の「言葉にならない」も好きなのだが、フェードアウト部分のメッセージ”We are over, Thank you”が切なすぎるので、ここには掲げなかった。



さよなら夏の日（山下達郎 ）

山下達郎といえば、誰もが思い出すのは「クリスマスイブ」だろう。パッヘルベルの「カノン」をモチーフに作られたこの曲は、1983年のアルバム『MELODIES』に収録されたが、88年、JR東海「ホームタウン・エクスプレス（X‘mas編）」のCMソングに使用されたことで知名度が上昇し、89年12月にはオリコンシングルチャートで、1位を獲得したビッグヒットだ。

しかし、僕らの年代だと、まずは、シュガーベイブ時代の名曲（例えば”Down Town”など）から始まり、ソロになった76年の『CIRCUS TOWN 』から80年にリリースされた『Ride on Time』やアカペラの『ON THE STREET CORNER』がとても身近であったのではないだろうか。実際、『Ride on Time』は、大学時代サークル仲間と大阪から津和野までドライブした時にずっとカセットでかかっていたアルバムだった。

一時期は、ブレバタよりも湘南に似合った音楽だったから、車やオートバイで仲間と海に出かけては、ウォークマンで山下達郎を聴いていたこともあった。

初期の頃の、例えば『LOVE SPACE』の山下達郎のハイノートは今でもとても好きだったりするし、今聞いてもいい曲だと思う。しかも吉田美奈子、村上秀一、細野晴臣といった当代きっての一流ミュージシャンによってサポートされている。

もちろん、82年の『FOR YOU』、83年の『MELODIES』、86年の『POCKET MUSIC』も、出る都度アルバムは買っていた。

さて、そんな彼の曲の中でどうしても選ばなければいけないといわれたら・・・。そしてあえて選んだのが、もっと時代を下った91年のアルバム『ARTISAN』に収められた名曲**「さよなら夏の日」**だ。ジーンと胸に滲みるメロディーとのびやかな山下達郎の歌声。もう子供じゃないんだ、そう言われたような気がした。そして、この年の暮れに僕は結婚した。

駅（竹内まりや）

竹内まりやを知ったのは、たぶん歌謡曲を流すラジオ番組だったはずだ。当時、貧乏大学生だった僕は、学費・設備費4年間無料という特別奨学生の恩恵を享受しつつ、おこずかいを稼ぐために休日には決まって電気の配管工事のアルバイトをしていた。近所の現場に行っては、朝から晩まで鉄管を曲げ、建築現場に設置し、電線を通し、電気器具を設置したりしていた。昼休みには食後の休憩にAMラジオを聞くのが習慣だった。そのラジオ番組で、”SEPTEMBER”が流されたのだった。1977年のことだった。

この曲はその年の日本レコード大賞新人賞を獲得するほどヒットし、竹内まりやは、アイドル的な人気を博すことになった。さらに、80年のシングルで資生堂化粧品CMソングとなった「不思議なピーチパイ」が発表になったが、平日は大学の講義に追われる日々だった僕にとっては、なんだか明るくて健全な大学生向けの曲で、うらやましいなあと思ったのを記憶している。

その後、一時期、竹内まりやはテレビから姿を消すが、山下達郎と結婚し、数曲発表した後、しっとりした大人の曲を集めた『REQUEST』をリリース。そこから本格的に聴くようになった。

92年の『Quiet Life』、01年の『Bon Appetit!』、そして07年の『Denim』といったアルバムにも、とても彼女らしい独特の曲たちが様々に並んでいる。

さて、そんな竹内まりやの曲の中で一番好きなのは、やっぱりシングルが出たのち『REQUEST』にも収録されている**「駅」**。 2年前に別れてしまった二人の、すれ違いを歌い上げた名曲だが、最初は中森明菜のために書き下ろしたものを後にセルフカバーで歌ったものだそうだ。その後もいろんな歌手がカバーしていて、ずいぶん印象は違うのだが、この曲に関しては、やはり竹内まりやバージョンに軍配が上がる。メリハリのある歌声と、自作の曲であるからこその感情の起伏の豊かさは、絶品だといえる。

American Night (浜田金吾)

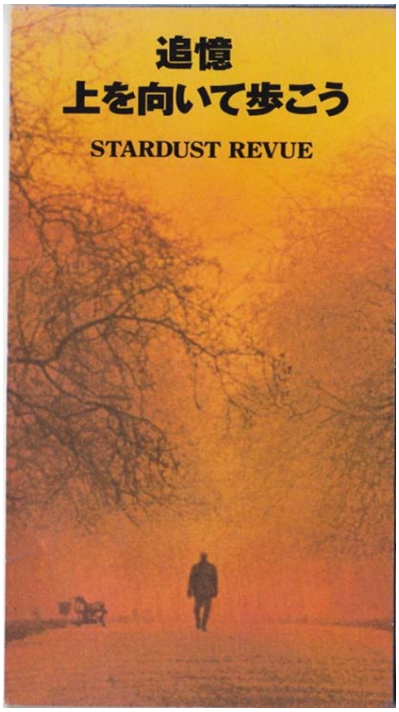
浜田といえば、80年代に入って浜田省吾が人気で、どんな音楽をやっているのか聞いてみようと思いレコード屋に行ったのだが、そこで見つけたのが、浜田金吾だった。この発見は、僕にとっては、大層大きな収穫で、その後、すっかり浜田省吾はそっちのけで浜田金吾に嵌ることになる。

当時、浜田金吾の名前を知っている人はほとんどいなかったはずだ。「浜田といえば金吾です」という帯をアルバムに付けたという笑い話があるのだが（実話）、しかし、彼はかなりの実力派のアーティストだったといえる。

もともとはクラフトというフォークグループのメンバーだったのだが、解散後独立し、山下達郎とAIR RECORDSを設立参加、ソロで活動を開始した。これも知られていなかったが、当時活躍していた歌謡曲の歌手の多くは、彼から曲を提供してもらっていた。岩崎宏美、西城秀樹、太田裕美、郷ひろみ、石川秀美、クリスタルキング、ジュディーオング、光GANJI、高橋真梨子、竹内まりやなど、数えきれない歌手が彼の曲を歌ったのだった。

しかし、彼の本領は、80年から85年までに出した7枚のソロアルバム。特に前半の4枚は、いまでもCDを買い直して持っているのだが、アメリカを題材にしたロックからバラードまでの様々な曲が収まる名作のオンパレードだ。当時の音楽雑誌などで、この分野の「真のアーチスト」と高い評価を得ていたといわれるのもうなづける。

浜田金吾の曲を１曲掲げるとするなら、『Gentle Travelin』というアルバムから、ウエスト・コートの匂いを感じることのできる名曲”American Night“だろうか。ブルース的な曲調にショートストーリーのような歌詞が相まって、とてもいかした曲に仕上がっている。



追憶（スターダストレビュー）

大学三年の時だったはずだ。NHK FMを聞いていたときに登場したのが、デビュー間もないスターダストレビューだった。1981年のデビューアルバム『Stardust Revue』の中から、「シュガーはお年頃」や「ロストラブ」など、ライブで数曲を演奏したのだが、デビューしたばかりのバンドとは思えないほど、テクニックのしっかりしたグループだったことに驚いた。特にボーカル兼リードギターの根本要の声とギターテクニックは、すぐさま僕をレコード屋に走らせたほど魅了したものだった。

そんなスターダストレビューの曲の中には、「トワイライトアベニュー」、「今夜だけきっと」、「夢飛行」、「木蘭の涙」、「7月7日」など、好きな曲が多い。オフコースや角松敏生同様、多くの曲をカラオケで歌えたりする。

だから、一曲だけ選べというのは、相当困難な作業なのだが、あえてあげるとしたら、「追想」を掲げたい。92年に発表された、大人の恋のバラード曲だ。切ない旋律と歌詞は、心に染み入る名曲として広く知られている。残念ながら、92年は米米CLUB 「君がいるだけで」、槇原敬之「もう恋なんてしない」、平松愛理「部屋とYシャツと私」、Dream Come Ture「決戦は金曜日」、稲垣潤一「クリスマスキャロルの頃には」、井上陽水「少年時代」、中山美穂&WANDS「世界中の誰よりきっと」などのヒット曲目白押しの年だったこともあり、ヒット曲ランキング50位には入らなかった。ちなみに陽水の「少年時代」は好きな曲の一つだ。

スターダストレビューの曲は、意外と多くのCMに起用されてきた。デビュー作「シュガーはお年頃」はシチズン、「夢伝説」はカルピス、「Be My Lady」等はメニコン。まだまだこうして広く彼らの演奏が聴けるのはうれしい限りである。

1996年9月に行われた35周年記念ライブ@横浜アリーナ
6時間に及ぶ演奏が繰り広げられた。

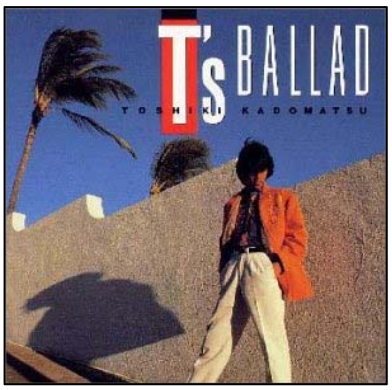
NO END SUMMER （角松敏生）

1960年生まれの角松敏生。同じ年であるが故、デビュー当時から噂を聞き、そしてすっかり魅了されてきた。特に20代後半には、角松ばかり聞いていた時期があった。これだけ長くずっと聞き続けているミュージシャンは彼だけだろうか。

ニューミュージックの系譜に突然登場し、その殻を破るファンキーな楽曲は、もっともっと売れてもよかったはずなのだが、「なんとなく名前は知っている」ぐらいなのは何故なんだろうか。

80年代半ばから杏里（”CAT‘S EYE”（プロデュース・編曲）、「悲しみが止まらない」（編曲）、”I Can‘t ever change your love for me”（作曲））や中山美穂（”You‘re My Only Shinin’ Star”（作詞作曲））等の有名アーティストへの楽曲提供等を行ったり、若手の育成に努めてきた。

93年からの5年間は一時的に休業を行い、音楽プロデューサー業に専念したが、97年長万部太郎名義のバンド「AGHARTA」としてリリースした「WAになっておどろう」は、NHKの「みんなのうた」で放映され、また、V6が同時期にカバーしたことから、長野オリンピックのテーマ曲になり、教科書にも掲載されるほど有名になった。



アルバムは通算39枚。その中にはこれまで様々な試みをしてきた角松の軌跡がしっかりと刻まれている。

この中で僕が特に好きなのは初期のバラード曲を収録した「T’s　Ballad」。吉田美奈子の歌声がフューチャーされた”OVERTURE”から始まる曲たちはどれも素晴らしい。その中であえて一曲掲げるなら、今でもライブのアンコール最終曲として演奏される”*NO END SUMMER*”だ。30周年や35周年記念ライブで演奏されたギター1本で歌うアコスティックバージョンが大好きなのである。

ちなみに角松は、休業前の87年に、初の試みとして自らのギタープレイをフィーチャリングしたアルバム『SEA IS A LADY』を発表したが、その中の一曲”OSHI-TAO-SHITAI”は、フュージョンテイストの最高の一曲でもある。去年の35周年ライブで披露され、17年は、この路線でひた走るらしい。

8．フュージョン（ロックからジャズへ）（洋楽＋邦楽）

ロックからジャズへ好みの音楽が移行するのは、必然だった時代。多くのアーティストが、1960年代後半からにエレクトリック・ギターやエレクトリック・ベース、エレクトリック・ピアノといった電気楽器を用いてジャズにロック的要素を取り入れ、ロック寄りの人に門戸を開き、ロックもジャズのリズムを取り入れるなど、その融合が図られた。

ジャズ側の有名人は、ハービー・ハンコックやジョー・ザヴィヌル、ヤン・ハマー、チック・コリア。ロック側はジェフベックやTOTOのスティーブルカサーなどが挙げられる。
エレクトリック・ジャズ、ジャズ・ロック、クロスオーバーなどと呼ばれた音楽は、フュージョンとしてその分野を確立し、今に至っているが、80年代には、そのど真ん中のまさにこれぞ「フュージョン」と呼べる音楽分野に満を辞して登場したのがウェザーリポート、ブレッカーブラザース、スパイロジャイロ、そしてスタッフだった。

スティーブガットやリチャード・ティーなど、当時のミュージシャンの音は、とても心地よく、少年から大人になる時代を彩ってくれた。

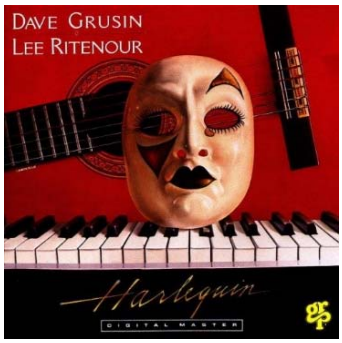
海外では専らジャズ側のミュージシャンの活躍が目立ったフュージョンだったが、ジェフ・ベックが、ブローバイブローで、ジャズ的フレーズを取り入れ、フュージョン側にシフトしたのも、ロックからジャズへの橋渡しに大いに役立たのではなかっただろうか。75年の"*Cause We've Ended as Lovers*"は、今聞いても名作だと思う。

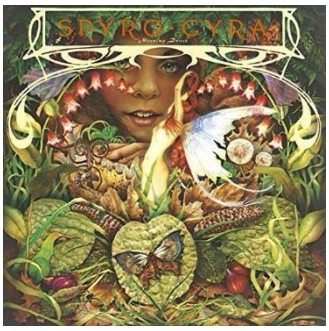
日本でも渡辺貞夫や深町純が活躍し、78年のランディ・ブレッカーやリチャード・ティーも参加した「深町純＆ニューヨーク・オールスターズ・ライブ」は、当時のフュージョンファンには垂唾のアルバムだった。

また、77年にカシオペアが、78年にはザ・スクエアなどが誕生した。

ザ・スクエアの伊東たけしのサックスと安藤まさひろのギターは、当時のロック少年にも賞賛されたものだった。

87年に渡辺香津美が出したビル・ブルーフォード、ジェフ・バーリンとのトリオ作品『スパイス・オブ・ライフ』も素晴らしいアルバムだったし、角松敏生の『SEA IS A LADY』も偉大な功績として掲げられる。





Departure In The Dark（深町純）

日本のフュージョンは、海外勢のTOPアーティストたちに押されてあまり盛り上がったとはいけないかもしれない。わずかに数名（数グループ）が名を馳せたぐらいだろうか。その中にあって、深町純は、一流の海外アーティストたちとアルバムを作り、日本のフュージョン界にその名を残した一人だろう。

そんな中でも、深町純の名前を広く世間に知らしめたのは、1978年発表のアルバム"On The Move"ではなかったか。

このアルバムは、深町純のスタジオ・アルバムで、単身ニューヨークへ乗り込み、現地の著名ミュージシャンたちと作り上げた。参加したミュージシャンは、ブレッカー・ブラザーズやスタッフのメンバーだ。

そのアルバムのA面最後とB面最後を彩るのが”Departure In The Dark”だ。A面の方は、深町純のシンセサイザーがフューチャーされ、メロディアスな曲が展開され、徐々に後半に向けて盛り上がりを見せる。この流れはB面の”Departure In The Dark – Again”へと引き継がれることになる。アンソニー・ジャクソンのうなるギターから始まり、随所にバリー・フィナティのピッキングするベースとスティーヴ・ガッドの複雑なドラムスが曲を盛り上げる。

実はこの曲を初めて聞いたのは、NHKで1978年に放映された「早筆右三郎」のテーマ音楽としてでだった。アヴァンタイトルのあとで、横尾忠則のタイトルバックに深町純によるシンセサイザーの主題曲”Departure In The Dark”が流れるという斬新な時代劇だった。明治初期、新聞記者を志す若者が、天保時代に瓦版の記者だった戯作者・一返舎二八を訪ねて話を聞く、一話読み切りという仕掛けのドラマだった。江戸の町に起こる大小の事件を、右三郎が周囲の人びとともに解決していく物語が展開されていた。最初はドラマが面白くて見ていたのだが、そのうちに深町純の曲に嵌り、あちこち探してこのアルバムにたどり着いた。そしてその錚々たるメンバーに驚いたものだった。

My Sweetness (Stuff)

1970年代後半に、ニューヨークで活躍していたスタジオミュージシャンが集い結成されたのが、フュージョンバンドとして名高いStuffだ。リーダーのゴードン・エドワーズ（ベース)を中心に、コーネル・デュプリー(ギター)、エリック・ゲイル(ギター)、リチャード・ティー(キーボード)、スティーヴ・ガッド(ドラムス)、クリストファー・パーカー（ドラムス)といった多彩なアーティストが名前を連ねる。ツインドラム、ツインギターが特徴のこのバンドは、1976年にファーストアルバム『stuff』を発表。一躍有名になる。

ちょうど高校に入学した僕は、たまたまラジオ番組で放送されたMontreux Jazz Festivalでの彼らの演奏を耳にして、すっかりはまってしまった（これはその後『Live at Montreux '76』として発売された。）。

その後、77年に『More Stuff』を、78年には『Stuff It』をリリース。そして同年には来日し、東京郵便貯金ホールでライブを行った。これは『Live Stuff』として発売され。受験勉強真っ只中にもかかわらず、このライブを聴きに行き、彼らの完成度の高さに驚愕したのを覚えている。特にスティーブ・ガットのドラミングの凄さに、釘付けだった。

80年代に入ると、各メンバーがソロ活動などで多忙になったため、自然消滅することになるが、その後スティーブ・ガッドを中心にコーネル・デュプリー、リチャード・ティーらにより、 The Gadd Gangが結成された。

さて、Stuff といえば、なんといっても『stuff』の二曲目に収録されている”My Sweetness”（愛しの貴女）がいい感じだ。 NHK-FMの「軽音楽をあなたに」のテーマ曲に採用されたが、特にリチャード・ティーの奏でるフェンダー・ローズが極上のきらめきを放っている。1分半程度の短い曲なのだが、これを聴くと「今日も元気に行くぞ！」という気持ちになれるのが嬉しい。

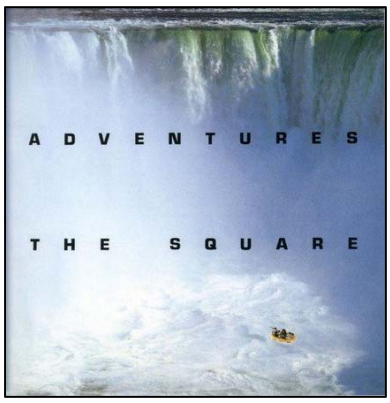
CAPE LIGHT（ The Square ）

日本を代表するフュージョンバンドとして名前が挙がるのは、カシオペアとザ・スクエアだ。カシオペアがギターメインのバンドであったのに対し、ザ・スクエアは、サックス（リリコン）とギターがお互いに主張し合うバンドだった。そしてカシオペアの方がよりBGM的な曲を演奏していたので、主題のはっきりしていたザ・スクエアの方が、どちらかというと僕は好きだった。

ザ・スクエアは、1976　年に安藤まさひろと伊東たけしによって結成されたが、そのバンドの名前が、当時はやっていた「MADISON SQUARE Bag」のスクエアから取ったというのが笑える。僕も高校時代はマジソンバッグで通学していた。

82年リリースのアルバム『脚線美の誘惑』から知名度が上がり、84年にリリースされたアルバム『ADVENTURES』でその人気を決定的にした。このアルバムは、ザ・スクエアの8枚目のアルバムにあたるが、ジャズアルバムのカテゴリーではなく、歌謡曲なども含めた一般アルバムのカテゴリーでベスト10に入るなどフュージョンアルバムとしては異例のヒットを記録した。

このアルバム収録の”ALL ABOUT YOU”と”TRAVELERS”の2曲がサントリーホワイトのCMソングとなり、伊東たけしも「リリコン奏者」としてCMに出演したのを、今でも覚えている。



丁度その頃読みふけっていた矢作俊彦の『暗闇にノーサイド』という小説のBGMとして聞いていたこともあって、『ADVENTURE』に収録された曲の一つ一つが、小説のストーリーととてもマッチしていて、ある意味、このアルバムは僕にとって、小説のサウンドトラック盤みたいな意味合いがあった。

彼らには珍しく、コンセプトアルバムとして製作され、オープニングとエンディングにタイトル曲がそれぞれ「プロローグ」「エピローグ」として収録されているのだが、この曲がとてもいい感じで盛り上げてくれる。７曲目の” CAPE LIGHT”はサックスが切々と歌う、バラード調の名曲だ。今聞いても、本当に良い曲だと思う。いまだに『暗闇にノーサイド』を読むと、頭の中でBGMとしてこの曲が流れるのだ。

9. ジャズ（洋楽）

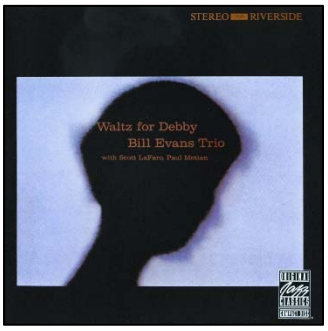
中学時代にはハードロック、高校時代はニューミュージック。そんな風にみえる僕の音楽遍歴は、実は、もう少し多層的だった。フュージョンが好きになれば、その後JAZZに嗜好が向くのは至極当然なことで、しかも、高校の朝に流れる音楽が、キースジャレットのケルンコンサートで、毎朝聞かされたのだから、Jazzyなソロピアノには馴染みができ、いろいろと聞くようになったのは自然なことだった。

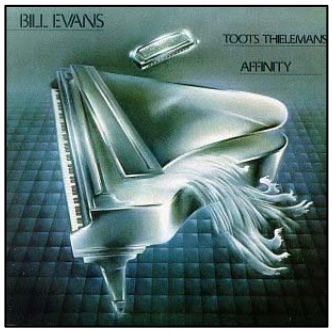
もっとも、初めてJAZZをちゃんと聴いたのは、姉貴の買ったビル・エバンスの” Waltz for Debby”という名盤中の名盤。そこからビル・エバンスをほとんどすべて聞きまくり、ずぶずぶとJAZZに嵌っていくことになった。

最初に聴いたのがピアニストのJAZZであったことから、その後、キースジャレットのみならず、ケニー・ドリュー、オスカーピーターソン、バド・パウエル、マル・ウォルドロンといったピアニストをあれこれ聞いた。そのうち、彼らのバックでスイングするベースを聞かせてくれるミュージションに興味を持つようになり、ケニードリュートリオの弩級ベーシスト、ニールス・ペデルセンや後期のビルエバンス・トリオにいたエディー・ゴメズのベースのアルバムにも手をだした。エディーは、マンハッタンジャズクインテットでも、僕の好きなドラマー、スティーブ・ガットと合流しているのが嬉しかった。サントリーのCMで有名になったロン・カーターは、NY赴任時代に有名なジャズクラブ「ビレッジバンガード」で聞くことが出来た。

それ以外でも、女流ジャズピアニストのリズ・ストーリーやハーモニカ奏者のトゥーツ・シールマンス、ジャズシンガーのヘレン・メリルやトニーベネット、渋いトランペットのチェットベーカー、サックスの巨匠ソニー・ロリンズ、もはや語る必要のないトランペットの帝王マイルス・デイビズ（59年のアルバム『Kind of Blue』の3番目のトラック“Blue in Green” が大好き。）を聴き、さらに、NYでは、マンハッタントランスファーやNew York Voicesなどのジャスボーカルグループのライブにも参戦出来た。

最近もキース・ジャレットのライブを聴きに行くなど、僕のジャズ遍歴はまだまだ今も続いているのである。





長野県戸隠キャンプ場
長野をぐるっと巡ったツーリングの最後に立ち寄った。

But beautiful（Bill Evans）

　ビルエバンスといえば、ソロやトリオで名を馳せたジャズピアニストだ。
ビルエバンスのピアノだけは生で聞いてみたかったのだが、僕がきちんと聞くようになった時には、すでに帰らぬ人となっていた。折角NYに赴任したのに、かの有名なビレッジバンガードなどのJazz Clubで彼の奏を聞くことが出来なかったのは本当に残念だ。
　さて、ビルエバンスの作品の中で名演奏とされるものはとても多い。“My Foolish Heart”、“Waltz for Debby”、“Days of Wine and Roses”、後期の”You must belive in Spring” “You will meet again”など、どの曲も珠玉の名作である。しかし、今回ここではあえて、著名なアーティストのコラボの中から一曲。
　僕として掲げるべきアルバムは、とっても思い出のアルバム「The Tony Bennett Bill Evans Album」。1975年の作品だ。ビルエバンスのリリカルな演奏はトニーベネットの甘い声と抜群の相性。しかも有名曲のオンパレードだ。しかし、なかでも、好きなのは、“*But Beautiful*”。
　親友と二人、信州戸隠までオートバイを飛ばし、テントを張って焚き火をしながらウォークマンで聞いたのがこの曲だった。

“Love is funny or it's sad
Or it's quiet or it's mad
It's a good thing or it's bad
But beautiful”
「そんなものさ」という意味で使われる”beautiful”が、ありきたりな「美しい」ではないことが、人生を良く知っている大人のセリフっぽくて素晴らしい。
　ビル・エバンスは、このほかにも様々なアーティストとのコラボを残している。チェットベーカーとのコラボ『The Legendary Sessions』（59年）、トリオを組んだエディー・ゴメスとのコラボ『Intuition』（74年）、そしてスタン・ゲッツとのコラボ『But Beautiful』（75年）などなど。これらはもう僕が語る必要がないJAZZの名盤中の名盤だ。チェットベーカーのしっとりと甘いトランペット、透明感が増すスタン・ゲッツのテナーサックス、独特の音を奏でるエディー・ゴメズのベース。是非とも生演奏で聞きいてみたかった。

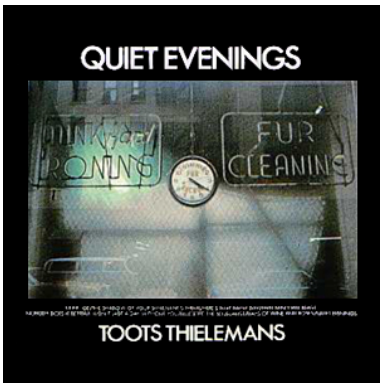
八ヶ岳山麓甲斐大泉にあったペンションドンキーハウス。
トゥーツ・シールマンスのハーモニカが良く似合う空間だった。

Here's That Rainy Day （Toots Thielemans）

ビル・エヴァンスの”My Foolish Heart”ばかり聞いていた僕が、トゥーツ・シールマンスに出会ったあの夏を今でも懐かしく思うことが多い。
八ヶ岳山麓にできたばかりのペンキの匂いのするペンションドンキーハウスに初めて行った1981年のあの夏。

そしてそこに通い詰めるようになり、多くの季節を過ごした。ピンと張り詰めた空気を背にして、薪ストーブに火を入れた早朝や夏の日差しが降り注いだ後の、熱気の残った夕暮れ時、八ヶ岳で体験したあの素晴らしかった日々の中で、いつも静かに流れていたのが、トゥーツ・シールマンスだった。

トゥーツは様々なミュージシャンと共演していて、中でも、僕はビル・エバンスと共演した『Affinity』が好きなのだが、トゥーツ単独なら迷わずに掲げるのが80年に発表されたアルバム『Quiet Evenings』だ。比較的イージー・リスニング色が強いアルバムだが、そこに収録された曲たちは素晴らしい。ギターと口笛のユニゾン演奏が美しく部屋に広がる”Jane's Theme”や、スタンダードの名作でもある” The Shadow Of Your Smile”。日本名は「いそしぎ」だ。どの曲も名作ぞろいといえるだろう。



その中でも、しっとりと降る雨を見ながら聞くのに最適な曲”*Here's That Rainy Day*“が一番のお勧め。 深煎りのオールドビーンズの珈琲を淹れて、大きな窓の向こうの風景を見ながらこの曲を聴いていると、深く深く、そして静かに心にこの曲が染みてくる。そして、もう一度あの時間に戻れたらいいのになんて思ってしまうから不思議だ。

“Here's That Rainy Day”は、スタン・ゲッツやビル・エバンスなど、多くのアーティストによって演奏されているのだが、トゥーツの演奏が、一番しっくりと来る。

30代になって、八ヶ岳での山遊びもしなくなり、ドンキーハウスも営業を終えてしまい、『Quiet Evenings』もいつのまにか、どこかに行ってしまったのだが、5年前に友人がどこかから掘り出してきてくれた。

久しぶりにこの曲を聞いたら、やはりあの頃に戻りたくなった。

Autumn Leaves（Manhattan Jazz Quintet）

ピアノ中心のJAZZ嗜好から少し変わってきたのは、Manhattan Jazz Quintet（マンハッタン・ジャズ・クインテット）を聴いたせいかもしれない。Jazzなんだけれど、どことなくフュージョン色も強く持った、軽快にスイングする演奏は、十分すぎるほど魅力的だった。

1984年にデヴィッド・マシューズ（ピアノ）を中心に結成された彼らは、日本の『スイングジャーナル』キングレコードの発案によるプロジェクトで、専ら日本向けに活動したのだという。しかし、そのファーストアルバム『Manhattan Jazz Quintet』は日本はもとより世界中に知れ渡った。しかもその布陣は、ルー・ソロフ（トランペット）、ジョージ・ヤング（テナー・サックス）、チャーネット・モフェット（ベース）、スティーヴ・ガッド（ドラム）という素晴らしいメンバー。しかも、86年の3作目『My Funny Valentine』からはビルエバンストリオのベーシストだったエディ・ゴメスが参加して、さらに厚みがました。なにしろスティーブ・ガットとエディーゴメスだもの、聞かないわけにはいかない。4ビートジャズを8ビート世代の彼らが演奏すると、 こんなにも異なる斬新な響きに変わるのかと痛快さすら感じるのだ。

渋谷のライブハウスで行われたライブ演奏は、その後『 Live At Pit Inn』として発売され、僕らを魅了した。もちろん、翌年の87年来日時には、僕もライブに参戦したことは言うまでもない。

Manhattan Jazz Quintetの魅力は、多くのJazzミュージシャンがそうであるように、そのライブ演奏にあるといってよい。だから、僕が最も気に入っているのが『 Live At Pit Inn』収録の”**Autumn Leaves**”だといっても不思議はないだろう。とにかく聞きほれてしまう素晴らしい演奏なのである。

残念ながら、88年にスティーブとエディーが脱退したしたのを機に、僕もこのジャズバンドを卒業したわけだが、今でも「ああJazzが聞きたいな！」と思ったときは、彼らの演奏からまず聞くのである。

Wishing-Hoping（Kenny Drew Trio）

ケニードリューを知ったのは、大学時代にたまたまレコード屋で、なにかいい感じのJAZZピアノはないかと探しているときだった。目に留まったのが『Kenny Drew By Request』というやつ。表紙の絵を見る限りにおいて、Jazzの名盤とはちょっと違うだろという造り。案の定、「スイング・ジャーナル」で、ケニー・ドリュー・トリオで演奏して欲しいスタンダード曲は何、という読者からの人気投票を受けて、上位１０曲を演奏して収録した、いわゆる「企画盤」だったわけだ。そもそも、このケニュードリューってどんな人？しかもこのアルバムにはスタンダードな曲てんこ盛りで、いわゆる寄せ集め的アルバム？と一瞬躊躇した。まあ、だまされたと思って買ってみるか・・・。それが出会いだったわけだ。果たして、すっかり騙された。それは思っていたのとはまるで反対側、めちゃくちゃいいという意味で、すっかり騙されたのだった。

ケニードリューという人は、アメリカで生まれたミュージシャンだが、1961年にパリに渡り、64年からデンマークのコペンハーゲンに活動の拠点を移した。ピアノテクニックは素晴らしい。そのドライブ感や切れ味あるテンションの中には、透明感のあるほのかな優しさ丸さが秘められ、ロマンチックな雰囲気すら漂うのが素晴らしい。以来、重量級のビートを供給するデンマーク人ベーシスト、ニールス・ペデルセン：この人のベースも素晴らしい）とエド・シグペン（ドラム）を生涯の演奏のパートナーとしたTrio演奏を続けた。

74年にリリースされた『Dark Beauty』がヨーロッパや日本でも人気を博し、その後、日本では各種の企画アルバムが作成されたというわけだ。どのアルバムもとても良くできていて、彼らの演奏をとても楽しめるのだが、そんな中で僕が一押しなのが、『Fantasia』というアルバムに収録されている“**Wishing-Hoping**”。煌びやかで透明感あふれるピアノ、重厚で技巧的なベース、静かにリズムを刻むドラムス。ピアノとベースのドラマティックな展開は、聞いていて心にぐっとくる。「Jazzはあまりね・・・」という人にも、まずは聞いてみて！とお勧めしたい一曲。

2013年5月15日、渋谷・東急文化村オーチャードホール。
キース・ジャレット・トリオ最後の来日コンサートだった。

The Köln Concert（Keith Jarrett）

ロックからクロスオーバー、フュージョンとくると、やっぱり次にJAZZということになる。姉貴の影響で聞き始めたビルエバンス。そしてとても聞きやすいケニー・ドリューとくれば、次に来るのはおのずとキースジャレットということになる。

高校時代の放送部は、朝からキースジャレットの「ケルンコンサート」を流すような輩（溝口肇）がいたので、多くの人が夜のイメージを持つこの曲は、しかしながらどうしても高校時代の朝のテーマ曲になった。

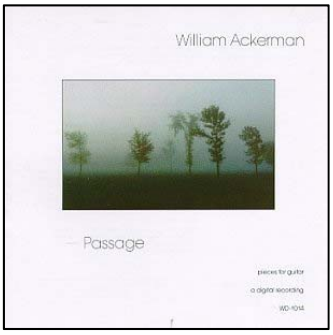
まだ寒さが残る2月の早朝、必死に英単語を暗唱しながら到着した学校の校庭に、静かに響いてたのが、この透明感あふれるピアノソロだった。

それ以来、キース・ジャレットもあれこれ聞いてきた。来日コンサートも何度か参戦し、あのピリッとした空気も楽しんだ。

彼は70年から2年間、のマイルス・デイビスのバンドに参加していたが、その後はドイツ・ミュンヘンECMレーベルからソロのアルバムを数枚だす。ケルンコンサートもそのうちの一枚だ。また、来日公演を10組のアルバムにまとめた「サンベアコンサート」も発売されたが、最後のアンコール曲局の美しさは、さらに、パレ・ダニエルソン、ヨン・クリステンセン、ヤン・ガルバレクという北欧出身ミュージシャンとともにカカルテットを組み、『My Song』などのアルバムを4枚残している。

80年代以降は、キース・ジャレット、ゲイリー・ピーコック、ジャック・ディジョネットというメンバーで、スタンダードの名曲の数々を演奏したアルバム『スタンダーズVol.1』『スタンダーズVol.2』『チェンジス』が人気を博した。彼らの演奏にも、数度参戦しているが、生で聞いた”Ballad of the sad young man”はとても美しかった。残念ながら僕が聴きに行った2013年5月のオーチャードホールを最後にトリオは解散したと聞く。

やはり、彼の演奏で僕が好きなのは、“Koln Concert”しかも、その一曲目。75年にケルンの教会で演奏された即興のソロ演奏。これほど感動するソロ演奏は、後にも先にも聞いたことがない。まさに、キースの真骨頂という演奏ではないか。



10. ニューエイジミュージック（洋楽＋邦楽）

ニューエイジミュージックという言葉を、最近ほとんど耳にしなくなった。これは、1970年代から80年代にかけて、「聴く人をリラックスさせ、ポジティヴな感情を与えたり、アンビエント音楽的なメロディが特徴の音楽」として人気を博した音楽分野だった。

日本ではシンセサイザーを駆使した喜多郎の音楽が、81年にNHKの人気ドキュメンタリー番組『シルクロード』のテーマ音楽となり、この分野の先駆けとされている。

もともとは、60年後半から、70年代にかけて、アメリカの反戦運動をベースに起こった思想的潮流がニューエイジと称された。それまでの、「進歩と発展」を否定し「平和と調和」をスローガンに世界的なムーブメントとなった。その後も、「自然回帰」「全体性」「バランス」「エコロジー」を推し進めるムーブメントがあり、東洋神秘主義にまで手を伸ばした思想は、ニューサイエンス（シェルドレイク、ライアル・ワトソン、アーヴィン・ラズロー、フリッチョプ・カプラなどの学者が様々な説を提唱した。）を生み、その流れに同調するように、音楽分野でもニューエイジミュージックを生んだといわれる。

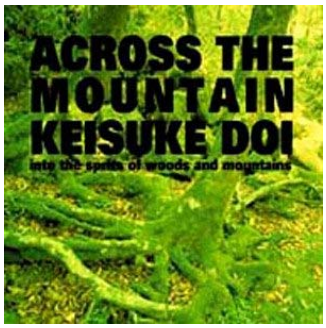
僕にとっても、この分野の音楽は、まさにリラックス、癒しの部分のメリットを多大に受けたといえる。

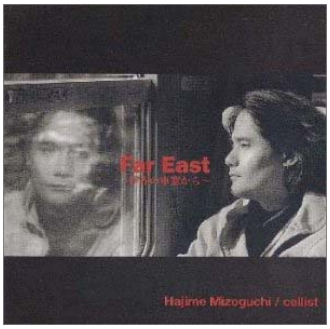
大好きな女流ジャズピアニスト、リズ・ストーリーが属したウィンダム・ヒル・レコード(76年創設）は、これぞニューエイジミュージックレーベル呼べるほど、各種のアーティストを世に送り出したが、その中でも、レーベル創始者のウィリアム・アッカーマンをはじめ、ジョージ・ウィンストン、マイケル・ヘッジスなどの作るニューエイジ系アコースティック音楽は、自然に優しい癒しの音楽であった。

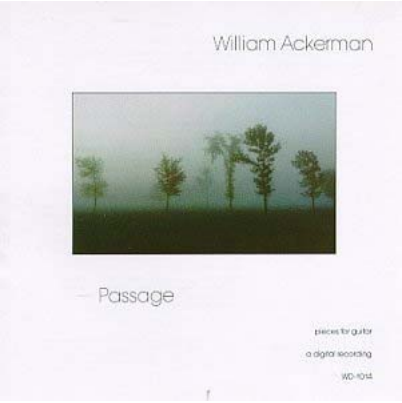
アルトサックス奏者のポール・ウインターは、広く民族音楽や自然界の動物などをテーマに、様々な曲を奏でている。

日本では、和太鼓や尺八などを現代風に演奏することが流行り、また、アコスティックな楽器をメインに演奏が行われるなど、自然回帰、癒しの音楽が静かなブームとなった時期もあった。風の楽団や鼓動、土井啓輔など、多彩なミュージシャンが登場した。

高校時代のクラスメイト溝口肇の作品も、この分野に分類されている。







Anne's Song　（William Ackerman）

　ニューエイジミュージックを世に広めたドイツのウインダム・ヒル・レーベルの創始者William Ackerman（ウイリアム・アッカーマン）は、自らギターを奏で、何枚かのアルバムを発表している。
　1983年に日本デビューとなったアルバム『Passage』は、それまでのフォークやジャズといった分野のギター演奏とは、一線を画す、透明感のある音色が特徴的だった。
　このアルバムには好きな曲がたくさん収められているが、"Anne's Song"が当時もっともよく聞いた曲だった。

Montana（ Paul Winter）

　Paul Winter（ポール・ウインター）は、アメリカのサックス奏者で、『Callings』では、クジラなどの声に合わせた楽曲を作ったり、有名作の『Sun Singer』では、癒しの音楽を追求。Sun Singer発表後に来日した際には、昭和女子大でのコンサートを聴きに行ったが、とても良い音に癒された。
　93年のライヴ・アルバム『Spanish Angel』では、グラミー賞も受賞した（さらにその後、3つのアルバムでオスカーを受賞している。）。どの曲もしっかりと癒されるが、このアルバムの中の"Montana"は大好きな曲だ。

山越へ（土井啓輔）

　一時期、民俗音楽に嵌ったことがあった。その民俗音楽という分野で日本の楽曲を聴いているうちに、尺八奏者の土井啓輔を知った。
　彼の尺八は、日本の伝統音楽とは一線を画した、まさにJAZZ的な要素満載の、ニューエイジミュージックだった。デビューアルバムの『山越へ』に収められた"Kiso"は、木曾の山の空気の透明感、瑞々しい木立、朝の陽光に照らされた木々のシルエットなど、息を飲む墨絵のような情景をJazzyに表現する、尺八中心に奏でられた秀逸な一曲だ。

Sentimental Wave（溝口肇）

　「世界の車窓から」というTV番組を知っている人は多いだろう。そしてそのテーマ音楽も広く知られている。それを作ったのが、溝口肇だ。彼は高校一年の時のクラスメイト。高校時代は、角松敏生のバンドなどで活躍するベーシスト山内薫とバンドを組んでロックをやっていたはずだ。
　数名のクラスメイトで学校を抜けだし、狛江の喫茶店で日がな一日あれこれたわいもない会話を交わした。そんな中にミゾもいたはずだ。
　僕らと違って、現役で東京芸大へ入学し、自分の世界を構築していっいった。高校卒業以来、音信不通だったが、同じクラスメイトの結婚式で再会し、86年に彼がデビューしたと知り、『Halfinch Dessert』をさっそく購入した。僕が89年にNY赴任するときも、壮行会と称して、昼間から山内薫とともに彼も参加してくれて、渋谷で飲んだくれた。
　その後も、自ら演奏する傍ら、ドラマやTV番組の音楽を手掛けたりしているが、そのミゾの曲の中では、 16年に発表された『LOVE SOUNDS』の中から、"Sentimental Wave"をお勧めしたい。

11．DIVA海外の歌姫たち（洋楽）

　海外のロック以外の音楽を聴く機会があまりなかった僕だったのだが、高校・大学時代によく聞いていたスティーブ・ガットとドゥービーブラザーズのマイケル・マクドナルドがサポートメンバーに参加したことで話題になったリッキー・リー・ジョーンズのファーストアルバム『Rickie Lee Jones』を聴いてちょびっと開眼した。彼女のフォーク、ジャズ、ブルースなどの影響が色濃くでた曲、そして独特の気だるいボーカルがいい感じだったのをよく覚えている。

　その後、SADEをよく聞いたのだが、1998年暮れにNYへ渡米すると、アメリカでは、フィリス・ハイマンやジャネット・ジャクソン、ポーラ・アブドゥールが人気を博していて、CDショップで買って、日本から持参したCDラジカセでよく聞いたものだった。

　帰国後は、ちょっとそっち系の音楽からは遠ざかってしまったのだけれど、7～8年前から、アメリカのオーディション番組『アメリカン・アイドル』を見るようになって、さらに、09年から始まった米国ドラマ『glee』を見るようになってから、結構海外POPSも聞くようになった。

　『アメリカン・アイドル』からは、シーズン1優勝者ケリー・クラクソン、シーズン4優勝者キャリー・アンダーウッドなど有名なDIVAが生まれている。

　また、『glee』の中でもたくさん歌われたレディーガガやビヨンセなど、パフォーマンスや歌唱力が素晴らしい歌姫たちも登場し、それをきっかけに、彼女らの曲をあれこれ聞いてみたりするようになった。

　いったん海外の音楽に興味が出ると、いろいろと聞くようになるもので、彼女ら以外にも、America‘s sweetheartとも呼ばれるテイラー・スイフト、ポップス界の若き歌姫カリー・レイ・ジョブセン、新世代ディーヴァ　リアーナ、ネクスト　マライア・キャリーと称される圧倒的な歌唱力のアリアナ・グランデなど、若手実力歌手も聴くようになった。

　これらのアーティストを聴いてしまうと、「日本の歌手ってなんだ？」という気になる。勿論日本にも歌の上手いDIVAはいるが、日本の歌謡曲の歌手とは全くレベルの違う、もう一段も二段も上の実力を持っている海外の歌姫たちの曲は、これからも注目なのである。

Again （Janet Jackson）

　ジャネット・ジャクソンがマイケル・ジャクソンの妹だということは知っていたけれど、それ以外の情報を持っていなかった1989年。前年に出たばかりのPaula Abdulの『Forever Your Girl』を買いに行ったNYのCDショップの店員に、出たばかりの『Rhythm Nation 1814』を勧められた。
　一曲目の" Rhythm Nation "は、NYのアパートで、CDにタイマーをかけて目覚まし代わりに流していた。この中に収録されている"Escapade"は、元気の出るメジャー調のとっても好きな曲だ。
　ジャネットに関しては、このアルバム以外は大して聞いてはいないのだけれど、一番好きな彼女の曲は、93年にリリースされた『Janet』に収録されている"**Again**"だ。ジャネットの曲にはアップテンポのダンスミュージック、ポップな曲などが多いけれど、この曲はしっとり染み渡るバラード曲。ビルボードチャート全米1位にもなった曲である。

Listen （Beyonce）

　ついついビヨンセというと渡辺直美を思い浮かべてしまうのだが、本物は、そんなんじゃない。芸としては、まあ、ありかもしれないけれど、ビヨンセに失礼だ。何しろビヨンセは上手い。そんじょそこらの芸人が真似できるレベルではないのだ。
　2003年にファーストアルバム『Dangerously in Love』で大ヒットしたビヨンセ。どの曲も本当にパワフルなヴォーカルを聞かせてくれる。歌のうまさは天下一品。ダンスミュージックもしっとりしたバラードもなんでもこなす。
　" Irreplaceable"、" Upgrade U"、"Get Me Bodied"、" If I Were A Boy"、" Single Ladies "など、様々なヒット曲を生み出し、アルバム『4』と、全世界のiTunes Store限定でリリースした5番目のアルバム『BEYONCÉ』は大人気を博した。
　　05年にブロードウェイ・ミュージカルを映画化した『ドリームガールズ』中で歌われた"**Listen**"は、ガツンと胸倉をつかまれるような、本当に「物凄い曲」としか言いようのない曲だった。まさに歌姫の貫禄十分の、絶対に聞かなければいけない一曲である。

Because of You （ Kelly Clarkson ）

　ケリー・クラークソンを知ったのは、米国の人気オーディション番組『アメリカン・アイドル』シーズン7（2008年）を見始めたころだった。この番組のシーズン1で優勝したのがケリー・クラークソンだったからだ。ちなみにシーズン4からはキャリーアンダーウッド（優勝者）、シーズン8からはアダム・ランバート（準優勝者）といった実力者が多数輩出されている。
　オーディション直後に発表したシングル"A Moment Like This"は、ビルボードランキング2週目からいきなり1位という快挙。
03年のファーストアルバム『Thankful』は初登場1位だったのだという。 さらに04年のセカンドアルバム『Breakaway』には"Breakaway"、"Since U Been Gone"、"Behind These Hazel Eyes"、"Because of You"、"Walk Away"などのヒット曲が収録されており、大好きなアルバムになっている。 中でも"**Because of You**"はケリーの歌声が堪能できる、しっとりと落ち着いた秀逸な一曲だ。

12. J-POPS（邦楽）

1990年代を過ぎると、従来の歌謡曲もロックもニューミュージックもなんとなく全部ひっくるめてJ-POPなどと呼ばれるようになった。どこからがロックで、どこからが歌謡曲なのか、区別がつかず、まあ、今はやりの若者たちの曲がJ-POPだなんて考えれば早いのだろうか。

J-POPの走りとしては、スピッツとかミスチル、プリンセスプリンセス、なんかがいたし、安室奈美恵、ZARDなどが出始めた時期ということなんだろう。彼らの曲はiPodに入っている。

2000年に入ると、男性では福山雅浩、平井堅、SMAPなどが台頭する。女性では、浜崎あゆみ、柴咲コウ、中島美嘉などが存在感を示した。

さらに10年代には、AKBや各種ジャニーズ系のアイドル、そしてEXAILが圧倒的人気で迎え入れられている。

個人的には、女性のJ-POPアーティストが好きで、やはり安室奈美恵、倖田來未、中島美嘉、柴咲コウ、BoAなどのラブバラード系の歌をよく聞くようになった。昔の歌謡曲と聞き比べても、音の作りがとても複雑で、しかも、感じのよい仕上がりになっている曲が多いのが嬉しい。

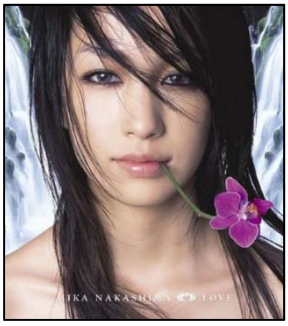
POPの良さは、日本語ならではの美しさだろうか。さらにメロディーと歌い手の思い入れ。そんなものがトータルで素晴らしい作品になる。

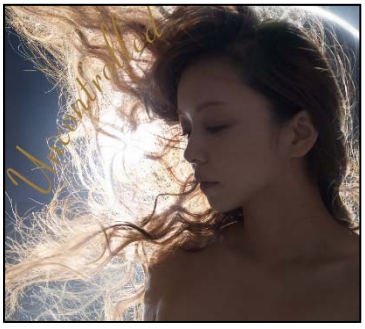
ということで、僕の好きなJ-POPのお勧め曲をノミネート。

中島美嘉	雪の華(03)
中島美嘉	桜色舞う頃（05）
BoA	メリクリ（07）
安室奈美恵	LOVE STORY（07）
倖田來未	Moon Crying（08）
KOH+	最愛（09）
JUJU	やさしさで溢れるように(09)
西野カナ	会いたくて 会いたくて(10)
青山テルマ	ずっと。(11)

これらの多くの曲は、ついついいつの間にか聴き惚れてしまう恋愛を歌ったバラードだ。好きな人を思って歌った曲、破れた恋や昔の恋人を思い歌った曲。どれも心に染み入る。どの時代もそうだけれど、やはり誰かを愛する気持ちは暖かい。

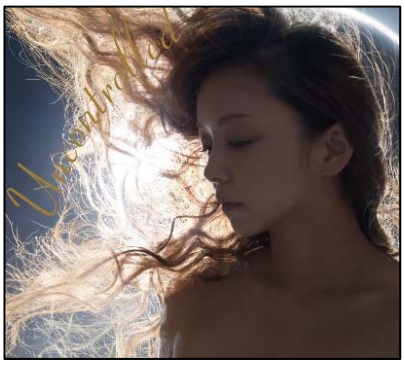
これからもこんな心に染み入るJ-POPの名曲が生まれて欲しいものだ。





最愛　（KOH+）

　KOH+（コウプラス）とは、2007年放映のフジテレビ系月9ドラマ『ガリレオ』のテーマソング制作のために結成された柴咲コウと福山雅治による音楽ユニット。
　さらに映画『容疑者Xの献身』（08年）、ドラマ『ガリレオ』(13年）、映画『真夏の方程式』（13年）の主題歌を手掛け、13年にアルバム『Galileo+』をリリースした。楽曲としては、「KISSして」（07年）、「最愛」(08年）、「恋の魔力」(13年）を発表している。
　女優としての柴咲コウは、以前から好みだったが、映画主題歌「月のしずく」（03年）や「かたち あるもの」(04年）がヒットしたことで、歌手としてのキャリアも歩み始めている。
　KOH+の曲はどの曲もなかなか良くて、福山のアーティストとしての実力を見直したが、中でも「**最愛**」はとても良い曲だ。曲調と柴咲コウの声質が良い具合にマッチしている。福山バージョンもあるが、やはりここはKOH+バージョンで聞きたい。



Love Stroy　（安室奈美恵）

　安室奈美恵というと、ついつい1994年スタートの『ポンキッキーズ』に鈴木蘭々とのコンビ“シスターラビッツ”としてレギュラー出演していた小さな女の子というイメージがいまだ抜けない。あるいは95年の『THE夜もヒッパレ』のレギュラーとしてSUPER MONKEY‘Sの一員で出演していたイメージが強い。一人頭抜きんでてたために、ソロになり、残りのメンバーはMAXになったみたいだが、確かに歌も踊りも一生懸命やってたなという印象がある。
　小室哲哉プロデュースで、一躍有名になり”アムラー”なる言葉も生まれるほどになったが、その後の躍進はめざましいものがあり、今やJ-POPの押しも押されぬ歌姫となっているのは誰もが周知だ。いつまでも若いなあと思ってたけれど、その安室もいつのまにか、39歳。
　安室の曲には良い曲がたくさんある。僕が好きなのは、13年のドラマ『私が恋愛できない理由』の主題歌となった”*Love Story*”だ。その年の最も配信セールスが優れている楽曲に贈られる「ソング・オブ・ザ・イヤー・バイ・ダウンロード」を受賞した曲だ。バラードベストアルバム『Ballada』にも収録されている、とても良い曲なのである。

Moon Crying　（ 倖田來未 ）

　倖田來未は不思議だ。普段大阪弁でしゃべっていると、その辺にいるようなおねえちゃんなんだけれど、一度マイクを持って歌い出すと、人が変わる。アメリカで先にデビューしたという経歴がそんな思い込みをさせるのだろうか？
　2004年、アニメ『キューティーハニー』の主題歌でもある「キューティーハニー」で一躍有名になると、次々にヒットを量産することになった。08年のラジオでの失言は残念だったが、その後も産休を挟んで、ライブ活動を中心に活躍している。
　“hands”(05年）、” Promise”（05年）、“you”（05年）、「愛のうた」(07年）、「好きで、好きで、好きで。」（10年）、「愛を止めないで」（11年）、「 Dance In The Rain」(14年)など、いろいろと良い曲を世に送り出しているのだが、中でも08年にリリースされた“*Moon Crying*”は、転調を効果的に用いた構成と倖田來未の清らかな歌声に思わずほろりと来る一曲だ。

13. そして最近好きな曲たち（邦楽＋洋楽）

最近、何聴いているだろう。2016年のオリコン年間ヒット曲上位20を見てみると、AKBグループとジャニで占められていて、全くつまらない。32位にかろうじて星野源の「恋」が入っているくらいか。

一応、息子が聴いていたり、SNSで話題になったりするので、若手バンドの曲も聞いてみたりはしている。例えば、SCANDAL、Silent Siren、BAND-MAIDといったガールズバンドが格好いいとか、実力派バンドONE OK ROCK、BUMP OF CHICKEN、RADWIMPS、そしてanderlustとか、まあ、若者も頑張っているようだとは思う。緑黄色社会の「またね」なんかは結構好きな曲だった。

そうなんだけれど、ずぼっと嵌るアーティストがいまひとついないのだ。だから角松敏生を相も変わらず聴くはめになる。

そういえば、数年前のSummer Sonicで見たきゃりーぱみゅぱみゅとPerfumeは、案外ジューシーフルーツなどの昔のテクノサウンドを思い出したりしながら楽しんでいる。

特にPerfumeは、なぜか妙に気になるグループとでもおうか。何枚かのアルバムがiPodに入っている。そういえば、最近放映されていたドラマ『東京タラレバ娘』の主題歌"TOKYO GIRL"は、Perfumeの名作ではないかと思ったりしている。

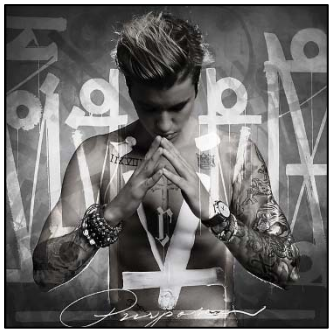
そういえば、唯一30代の若者で頑張っているのが、あまり知られていないと思うが、Jill Decoy associationだ。これはJAZZ指向の音楽なので、TVなどには現れないけれど、割とおやじの心をぐっと捕まえているみたいで、地味にファンが多いスリーピースのJAZZバンドだ。

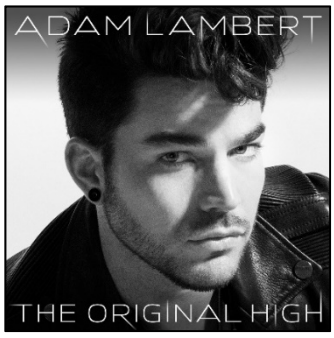
で、勢い、海外に目が向いてしまうのだけれど、こちらはこちらで、結構常連さんがヒットチャートの上位を占めている。

これまた数年前に幕張メッセでライブに参戦したハワイ出身のブルーノ・マーズは良かったなあ。2010年10月5日に発売されたファーストアルバムの中の曲、"*Talking To The Moon*"が好きだった。最近、長澤まさみの出演するCMで採用され懐かしい。後は誰もが知っている"Just The Way You Are"。これも名作だ。去年発売になったブラックミュージックっぽい"24K Magic"は、めちゃくちゃ売れているらしいけれど、僕は今一好きになれない。

他の男子だと今ソフトバンクのCMに出演中のジャスティン・ビーバーの名が挙がるが（生意気だけれど、確かに良い曲を書く）、若手ならChalie Puthの"*One call away*"はなかなか良いなあって思う。でもねえ、なんか最近のアメリカのヒット曲にはついていかれない。女性シンガーはすでにDIVAで名前を挙げた。

なので、ついついここは聞き慣れたAdam Lambertに走ってしまう。彼のソロはダンスミュージックが多いのだが、Queen + Adam Lambertがとってもフィットしているので、彼にはソロでも" Time for Miracles"のようなロック調の曲を歌って欲しいなと思うのは僕だけだろうか。





虹に気が付かず（ JiLL-Decoy association ）

数年前、youtubeをブラブラと廻っているときに、ばったり出会ったのがJiLL-Decoy associationだった。そのJazzyなサウンドと透明感のあるヴォーカルに惹かれOfficialとしてyoutubeにUPされているPVをあれこれ聞いてみた。「上質サボタ-ジュ」、”THOUGHT I‘D NEVER SEE YOU AGAIN”、「ドレスを着る前に」、”Take On Me”、”Red & Blue, Green & White”、そして「リハル」という曲があった。「リハル」は他の曲とはイメージの違う、もの悲しいバラードだったが、これはなんだろう？J-POP？それともJazzなのか？よくわからないまま、でも、すっかりこのスリーピースバンドに嵌ってしまったのだった。

ギタリストのkubotaがニューヨークの音楽学校でジャズ等を学び帰国後に、シカゴでJAZZを学んだドラマーのtowadaと意気投合。同時期にchihiRoとJAZZのセッションで出会い、2002年にバンドが結成された。

丁度僕が聴くようになった直後にとてもご機嫌な『ジルデコ5』が発売され、その多彩な曲の数々にすっかり魅了された。『ジルデコ5』は、第55回日本レコード大賞優秀アルバム賞を取った名作だった。

13年11月にジルデコ初の大キャパ会場の日本橋・三井ホールでの『ジルデコ5』リリースツアー・ファイナル！ in 東京という奴に参戦して、より好きになった。

その後、前作よりも少しだけ大人っぽい作品の並ぶ『ジルデコ6』が、さらについ先日『ジルデコ7』が発売された。

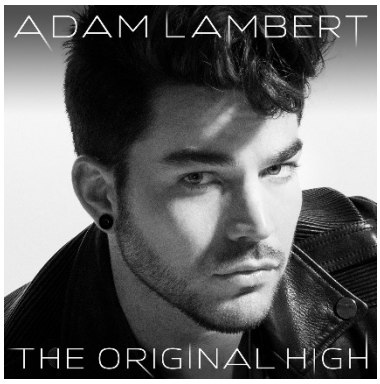
『ジルデコ7』の**「虹に気が付かず」**は、Jazzyなしっとりした曲。ジルデコの魅力満載なのがうれしい。歌詞はchihiRoが書いているが、最近は彼女も作曲を手掛けるようになり、奥行きが広がっている。お母さんになったので、さらにその深みが増すことを期待したい。

There I Said It（Adam Lambert）

アメリカのオーデション番組『アメリカン・アイドル』をシーズン7から見ていて、なかなか面白い番組構成に、一家そろってすっかりファンになっていたのだが、そのシーズン8（2009年）で出現したのがAdam Lambertだった。当時26歳の彼は、なかなか男前の、そして素晴らしい声の持ち主だった。特にオーデション中に歌われたLed Zeppelinの”Whole Lotta Love”を歌ったときのすばらしさ。「おお！こんなロックシンガーもいるんだ」と思った。

アダムは、82年アメリカインディアナポリスの生まれ。以前からミュージカルの仕事をこなしていたというだけあって、その歌唱力とエンターテナーとしての素質は、他の出演者と比較すると群を抜いていた。勿論、他にもクリス・アレン（シーズン8の優勝者）やアリソン・イラヒータ（上位入賞）など、実力者は何人もいたのだけれど、誰もがきっとアダムの優勝を予感したんじゃないかって思う。ただ、番組途中でゲイであるとの噂が立ち（番組終了後カミングアウトしている。）、保守層からの投票が伸びず、結局準優勝に終わる結果となった。

しかし、その番組の最終回で、Queenのブライアン・メイ、ロジャー・テイラーと共演し、すっかり気に入られ、Queenへの参加を打診されたといわれている。



その後、映画『2012』の主題歌“Time for Miracles”で注目を浴び、09年にはデビューアルバム『For Your Entertainment』をリリース。日本でも「神の声域を持つ世紀のヴォーカリスト」等と紹介された。

11年にMTV Europe Music AwardsにおいてQueenと共演。その後、『Trespassing』（12年）、『The Original High』（15年）をリリースし、世界各地をツアーで回るとともに、Queen + Adamu Lambertとして、各地でのライブツアーに同行している。日本にも、QALを入れるとすでに６回来日していて、日本にもファンは多い。QALはもとより、ソロにも良い曲はたくさんある。“Whataya Want from Me”、“If I Had You”、“Never Close Our Eyes”、“Another Lonely Night”、”Welcome To The Show”などなど。“There I Said It”は彼の高音の美声を堪能できる魅力的なお勧めの一曲だ。

“Travel Photography“

旅の記憶を引き出すための旅

佐渡へ

　ひょんなことから2017年2月8日に日帰りで佐渡へ行くことになった。佐渡は1988年に友人三人と車でキャンプに行ったのが最後だから、ほぼ30年ぶりといえるだろう。前日、風雪のため高速船が運休になり、フェリーも5時間近くかかったという話を聞いたが、幸い僕が行ったときには、午後から青空も広がり、穏やかな佐渡だった。それにしても、メインストリートを歩いていても、ほとんど人に出会うことがない。この島は、こんなに淋しい島だっただろうか。あの夏の煌めきはどこに行ってしまったんだろう。
いつかまた、あの時の夏のように、佐渡を楽しんで見たいと思った。

佐渡市両津港佐渡汽船ターミナル
Panasonic DMC-GM1,LUMIX 14m F2.5

佐渡汽船高速手ジェットホイール
Panasonic DMC-GM1,LUMIX 14m F2.5

佐渡金山地区　北野神社
Panasonic DMC-GM1,LUMIX 14m F2.5

佐渡市両津
Panasonic DMC-GM1,LUMIX 14m F2.5

佐渡沖より佐渡を望む
Panasonic DMC-GM1,LUMIX 14m F2.5

Supermoon
Nikon D800
TAMRON SP 70-200mm F/2.8 Di VC USD

ISO 160, aperture F6.3, shutter speed 1/1000

スナップの楽しみ

月の魔力

夜空を見上げてみると、そこには大抵月がぽっかりと浮いている。十六夜、立待月、居待月、寝待月、更待月・・・。そんな月を、僕はよく見上げる。

西欧圏では、月は不吉の象徴。そもそもラテン語で月を意味するlunaticは「狂気の」を意味する。仏国では、振り返って月を肩越しに見ると精神錯乱を起こすというジンクスが信じられていたし、狼男が変身するのも月夜だ。さらにギリシャ神話の月の女神ヘカテーは、冥府の守護神（＝死の女神）とされている。

ところが、日本人にとって月は古来から愛でるもの。どうやら世界あちこち見回しても、こんな風に月を愛でる風習はレアケースのようだ。

昔から、月は何らかの魔力を持っていて、西洋では”Bad Influence”が誇張されてきたが、東洋はむしろ月の魔力にこそ魅力を感じてきたわけで、その感受性は世界に誇っても良いものだと思ったりする。日本神話には天照、素戔嗚とともに三貴子としての月読尊が登場するし、そもそも月にこれだけの名前を付ける国は日本ぐらいなのではないか。

さて、この月だが、実はとても明るい。だからこそ魔力を発揮してきたのだろうけれど、その月を写真に撮ろうと思ったら、手持ちでも行けてしまうほどに輝いている。カメラを向けてそのまま撮ると、単なる光の丸が写るのみだ。

そこで、まずはカメラに望遠レンズ（200㎜だと小さくしか写らないので、トリミングが必要。）を装着したら、ISOを低くして、マニュアルモードで露出とシャッタースピードを決める。満月だったら、ISO400、露出8.0、シャッタースピード1/800で十分撮れる。勿論月の具合でそこからあれこれ調整してみよう。シャッタースピードが1/800とかだったら十分手持ち撮影も可能だ。いちいち三脚立てる手間もなく、さくっとスナップできるのが嬉しい。まずは、満月を狙って、月の魔力を切り取ってみよう。

［季節の花を楽しむための写真図鑑］

花図鑑　山茱萸（さんしゅゆ）

山茱萸（サンシュユ、学名:Cornus officinalis Sieb. et Zucc.）は、ミズキ目ミズキ科の落葉小高木。ハルコガネバナ、アキサンゴ、ヤマグミとも呼ばれる。中国及び朝鮮半島が原産地。江戸享保年間に朝鮮経由で漢種の種子が日本に持ち込まれ、薬用植物として栽培されるようになった。日当たりの良い肥沃地などに生育する。高さ3-15 mになる落葉小高木。樹皮は薄茶色で、葉は互生し長さ4-10 cmほどの楕円形で両面に毛がある。3月から5月にかけ、若葉に先立って4枚の苞葉に包まれた、花弁が4枚ある鮮黄色の小花を木一面に集めてつける。

（Wikipediaより）

［茶の快楽：その11］

茶の木神社の神茶

人形町は古くから日本橋の下町として栄えた土地柄。大名の屋敷などもたっていた地域だ。この一角に、その昔下総佐倉城主の・大老堀田家の中屋敷があり、その守護神として祀られたのが茶の木神社だった。神社の周辺に茶の木が植えられ見事であったことから、そう名付けられたのだとか。実際に祀られているのは、倉稲魂命（伏見稲荷大社の主祭神で、素戔嗚の娘。五穀豊穣の神）。いわゆるお稲荷さんなのだが、現在は、日本橋七福神の一つで「布袋尊」とされている。

茶にちなんだ神社なので、実際に周りには写真のとおり茶の木が植えられており、5月初旬の「八十八夜」の日には、日本茶業中央会、東京都茶協同組合、お茶の関係団体と地元の町会で感謝の奉納をするのだとか。茶摘みも行われ、生の茶がふるまわれたりする。

正月になると、ここの茶の木から作られた茶（実際には生産量がごくわずかなので、静岡産の茶葉とブレンドされているらしい。）が販売される。神様の足元の茶なので、「神茶」と呼ばれているようだが、ほんのりと甘い煎茶に仕上げられていた。

＜茶の木神社＞

住所：東京都中央区日本橋人形町1-12-10
　　地下鉄半蔵門線「水天宮前」駅より徒歩２分

旅のcafe　No:11　fukadaso cafe 清澄白河（東京）

いつの間にか清澄白河は、カフェの街になっていた。深川を擁するこの一帯は、まさに江戸のメッカ。深川江戸資料館があったり、江戸の豪商・紀伊國屋文左衛門の屋敷跡といわれる清澄庭園があったり、さらに小さな町工場や倉庫などが点在する、下町風情のある地味な町だった。

深川というと、個人的には父親の出身地であり、ルーツ的には関係のある土地柄なのだけれど、あまり良く知らない。以前中国茶の店があったりしたことから、何度か足を踏み入れたことがあるぐらいだが、いつの間にかすっかり雰囲気も変わっていた。

冬木にある某社のシンクタンクに用事があって行った際に、清澄白川駅に向かってぶらぶらしていたら出会ったのがこのfukadaso Caféだ。昔ながらの長屋風建物を改造してcaféスペースにしたお洒落な店だった。近所にはブルーボトルコーヒーも店を構えているので、東京café巡りの起点にするにはうってつけだ。

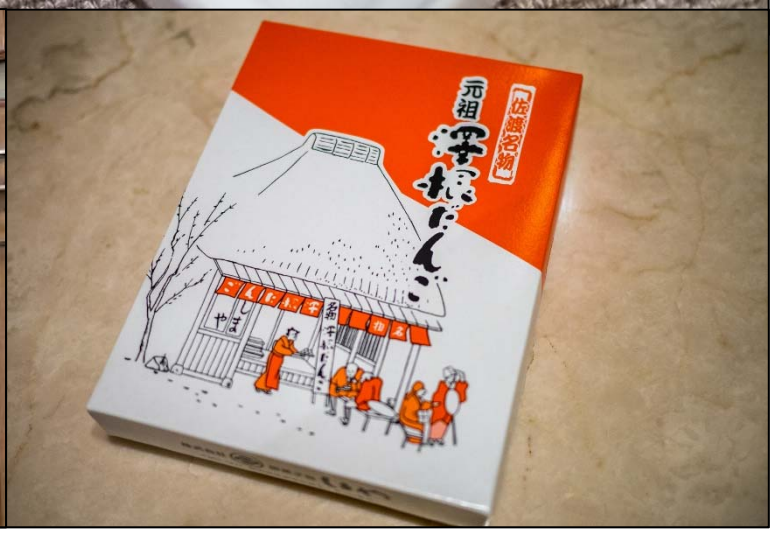
fukadaso　Cafe

住所：東京都江東区平野１-９-７

電話：未公開

営業：13:00～18:00

定休：火曜、水曜



旅のスイーツ　No.11　沢根だんご（佐渡）

　実に30年ぶりに佐渡へ行った。しかも冬のこの時期に日帰りという無謀な佐渡行だったわけだが、僕が渡った日は穏やかな曇天で、それほど大変だったという思いもなかった。佐渡に何か名物はと、タクシーの運転手に聴いてみたが、まあ「だんごぐれーかな。」とのこと。では、そのだんごってなんだ？と思わったわけだが、その正体は「沢根だんご」だった。

　江戸時代、金山で掘られた金は中山峠から沢根集落を通って船積みされたが、その峠の茶屋で売られていたのがこの沢根だんごだ。最初はランコという美しい娘が茶屋にいて、「ランコがいるから」と人気を博したが、そのうち「だんごがあるから」というふうに、だんごメインに変わったのだとか。それ以来、佐渡といえばだんご！というのが定着したらしい。

　佐渡産コシヒカリを自家製粉し、こねて蒸して、うすでつく。それを清冽な地下水で冷やし、手早くこし餡でくるむと出来上がり。餡の原料となる小豆も、無農薬の佐渡産。つるりと何個でも食べられる。今では２軒しかないという製造元の一つ「しまや」は1808年(文化5年)創業だとか。

御菓子処　しまや
住所：佐渡市沢根五十里989-1
電話：0596-22-7000
http://www.akafuku.co.jp/

Panasonic DMC- GM1、LUMIX 20mm F1.7
Queenのドラマー、ロジャーテイラーの投げたドラムスティック

今日の一枚

Queen + Adam Lambertのコンサートには、ここ数年で何回いっただろう。1975年のQueen初来日ライブには行ったものの、その後Queenのコンサートにはすっかりご無沙汰だったのだが、家人と息子がAdam Lambertに嵌ったため、国内はもとより、ロンドン、バンクーバー、ウィーン、ミュンヘンのコンサートにまで出かけ、彼らの音楽を堪能している。

16年9月の武道館での来日ライブには、3日間とも通いつめた。初日には、息子がステージから降りてきたAdam Lambertと握手を、さらに最終日には、ロジャー・テイラーがアリーナ席に向かって放り投げたドラムスティックを僕がゲットという幸運に恵まれた。この写真はそのドラムスティックなのである。

よく見ると、スティックの後ろ側に瑕が多くついているので、なんだか不思議に思っていたのだが、去年発売になった『ライヴ・イン・ジャパン サマーソニック2014』の彼の演奏の映像を見てみると、ほとんどドラムスティックの後ろ側で叩いている姿を確認することができた。なるほどなあ。でも、僕的には、ブライアンメイがピック代わりに使っているペニーコインが欲しかった(笑)。

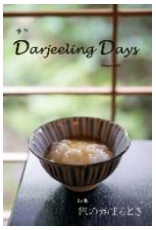
Voice From Editor

毎回毎回、本当に申し訳ないのですが、今回もほぼ私小説ならぬ超私的特集の雑誌になってしまいました。僕の場合、興味の対象が本当に多角的で、あれこれ広く浅くあちこちに散らばっているのですが、その中では珍しく音楽と写真だけは長く興味の対象になっています。もっとも、コアな音楽ファンの人たちからすると、通り一遍の薄い興味でしかないと思われるでしょうけれど、今回はそんな私的な「My Favorite Songs」を振り返ってみました。

10代から20代にかけて、割と系統だって各ジャンルの音楽を聴いていたのですが、30代になった途端、音楽は無節操。JAZZが好きですとかROCKが好きですと今となっては大手を振っていえるほどたくさんのことは知りません。それでも、他の方々もそうであったように、自分の人生の隣には常に音楽があった気がします。もちろん、自分で何か楽器を演奏しようとか歌を歌おうとは、今となってはほとんど思わないのですが、振り返ってみると、その時々の人生の岐路に、思い出の曲たちがあれこれあって、今回はそんな思い出の曲の中から、特に僕が好きな曲をいくつかここに並べてみた次第です。勢い余ってページ数もいつもより多いです。

冒頭にも書きましたが、ライターの納富廉邦さんにiPodを譲ってもらったとき、そこにUpされていた曲のジャンルの多様性に驚いたものでした。だから、本当は僕なんかより納富さんが自分の音楽遍歴をまとめたほうが100倍以上は面白いだろうなとは思うのですが（是非何処かで纏めてください。）、まあ、これは僕の超私的な雑誌ということで、好き勝手に特集してしまったというところです。

さて、次号Darjeeling Days 第13号は、6月下旬発行予定！



季刊Darjeeling Days

バックナンバーのコンテンツは、サイトからご参照いただけます。
http://www.tearecipe.net/dd/

Queen ＋ Adam Lambert　ライブ・イン・バンクーバー

Panasonic TX300

季刊 Darjeeling Days
Volume 12

発行日:2017年3月28日
発行人:平田公一
http://www.tearecipe.net/dd/